

琉球大学学術リポジトリ

第9回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学 公開日: 2016-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33485

第9回

びぶりお文学賞

作品集

琉球大学

第9回

びぶりお文学賞

作品集

琉球大学

第九回琉球大学びぶりお文学賞作品集

第九回琉球大学びぶりお文学賞作品集 目次

小説部門受賞作 該当作なし

小説部門佳作

傷が膿む前に

石嶺 眞太郎 6

(琉球大学・工学部・情報工学科二年)

かなさ

山上 不動 36

(沖縄大学・法経学部・法経学科三年)

詩部門受賞作 該当作なし

詩部門佳作

壁画

安里 和幸 78

(琉球大学・法文学部・総合社会システム学科三年)

眠る。

川根 慎司 82

(沖縄工業高等専門学校・機械システム工学科四年)

破れた家

霞 千明 86

(沖縄工業高等専門学校・生物資源工学科四年)

水風船

古謝 秀人

90

キヤッチボール

島袋 昂也

94

花火の話

真栄里 一青

98

そこにある

喜瀬 眞太郎

100

小説部門選評

(沖縄工業高等専門学校・メディア情報工学科四年)

104

詩部門選評

喜瀬 眞太郎

115

選考経過

喜瀬 眞太郎

122

琉球大学びぶりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」「育成の二環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。第七回（平成二十五年）から、応募資格が沖縄県内の大学生（高等専門学校の場合は本科四年次以上）及び大学院生に拡大されました。

装
丁

上
村

豊

小說部門

小説部門佳作

傷が膿む前に

石嶺 眞太郎

私が覚えている限りでは、確か翌年が沖縄県の本土復帰を果たした年であったから、つまりその前年の昭和四六年のことである。

当時の私はまだ遊びたい盛りの小学生で、そこらにいる普通の子供であった。両親や三人の弟妹と共に、防風林を隔てた海岸沿いの、こぢんまりとした木造の家に暮らしていた。葺いたコンクリートの瓦は風化し、塀は蔦と塩にまみれている。これもまたこぢんまりとしたガジュマルの枝葉が陰を落としていて、昼間でも幽霊が出そうな趣であった。私はそんな我が家のことが気に入っていた。

朝から山を小一時間も登って小学校へ通った。通学路からは碧の太平洋が望めた。まだ私はこの景色を見て溜息をつくほどの感性を持ち合わせていなかったが、妹の手を引いて

歩く道中の、気分はよかった。

学校の友人は少なくなかった。放課後は近所の子供達と海で遊んだ。テレビゲーム機などは誰も持っていないから、いつも海が遊び場だった。

日が暮れるまで白く小さなサンゴ片で水切りをして、沖に泊まる小舟まで泳いだ。

帰って玄関に上がる前に、塩と砂にまみれた身体を洗い流す必要があった。

家の門をくぐるとそのまま父に離れの風呂場へ連れて行かれ、弟妹も一緒に風呂を浴びる。

父の手口は巧妙であった。毎夜入浴の際にはシャボンパーティーと称し、手拭いでおおいに立てた泡を桶に集めて、私たちの頭からドツサリかぶせるのである。

父は、おそらく子供のみが特有に感じ得る石鹸の泡の魅力を知っていたのだ。

今やつまらない大人となってしまった私にはもうその面白みはわからないが、ともかく当時の私たち兄弟にとって、この父の催しは無性に愉快だった。

おかげで、私は日が暮れると夕焼けに染まる海岸に未練を残すことなく帰路に着いたものである。

母は料理が上手であったが、いささか健康志向が過ぎた。私は母の料理は大抵好物であったが、あのハンダマという紫色のヌメリとした野草のおひたしだけは好きになれなかった。

母はこの野草を茎ごと茹でて食卓に出すのである。茎は固く、噛めば噛むほど苦味が広がった。作った本人の母でさえこの料理が好物でないということは、私の目にも明らかだったが、

「健康のためなら死んでもいいという気概で食べるのよ」
などと言った。

当時の私にはこの極端な冗句はわからなかったが、父はこの言葉に大喜びでおひたしを平らげた。私も頑張つて残さず食べた。

両親とも大戦を生き延びている。二人とも、普段はそのことについて話題にもしなかった。改めて語られなくとも十分であった。当時は戦後処理が未だ十分ではなく、通学路の端に不発弾や錆びた小銃が山積みになっていたのだ。爆発事故も多々あった。

私たち戦後の世代の子供は、実際に戦争を経験しなくとも、その痕跡を肌感じて日々を暮らしていた。

それに、毎日の暮らしが楽しかったのである。両親にはいつも笑顔でいて欲しかった。いつもは明るい二人の表情が、戦争の悲しみに捕らわれ歪む様を見るのは、私にとつて大きな苦痛であった。その沈痛な眼差しは、子供たちのことなど忘れて過去の地獄に打ち震え、怯えていた。私はそのような両親の様子をひどく恐れたのである。

私がこの話題を無意識に回避したために、父や母から直接戦争の悲惨さを教わる機会はほとんどなかった。おそらく私以外の同世代の子供達もそうであったと思う。

このように先の大戦の爪痕が日常に陰を落とすことはあったが、それでも、少なくとも私の目

に映る毎日はそのほど暗鬱としたものではなかった。

豊かとは言えなくとも、恵まれた自然とそれなりに暖かな家庭の中で、私はそこらにいる普通の子供であった。

私が住んでいた部落では、年に一度綱引きをした。部落自体が海に寄り添っていたので、浜がその会場である。

その年も例外ではなく、部落中で準備が進められた。子供達は灯籠を手作りし、綱引きの前にそれを掲げて部落中を行進しなければならない。

私は行進の先頭を任された。鉦を打ちつつ、行列全体を縄の据えてある浜まで導くのである。

父が私のこの責任ある大役を喜び、綱引きの起源や意味を教えてくれた。

この部落は大陸から稲作が伝わった最初の土地であり、

「豊作祈願の綱引きは、大変由緒ある行事なんだ」とのことだった。

父の物知りを尊敬する私はへえふうんと感心したが、そのような行事の由縁などよりも、単に褒められたことが嬉しかった。

私の意気込みは十分だった。事前に行列の道程を練り歩き、道筋を完全に把握した。弟妹や近所の年下の子供たちの、灯籠の手作りを手伝ってやりもした。

骨組みに貼る油紙に、当時流行のテレビ番組に登場したタコのキャラクターの漫画を描いた。上手く描けたもので、私の子供達からの尊敬は頂点を極めた。

大人たちは綱引きに肝心の縄を編んでいる。それほど大きな縄ではないが、男たちが息を合わせて藁から縄を編み上げる様子は、熱がこもっていた。

藁から小縄を編んでいる爺さんの近くに寄って様子を眺めていると、側に呼ばれて編み方を教えてくれた。両手をすり合わせて藁束をねじりつつ、ねじる方向と逆向きに編み上げるのである。どうにも私は縄編みが下手で、せっかく教えてもらいながら編んだ小縄は、持ち帰って母に自慢する前に解けてしまっていた。

綱引きの前日には、すでに大人たちは縄を打ち終え先走りの酒盛りをしていた。私たちの灯籠も完成が間近である。

作業が佳境に入ったところで、豪勢な差し入れがあった。我が家の隣家の親父さんが、何段にも重なったバナナの房を抱えて持ってきてくれたのだ。

隣家のバナナの木は、部落の子供たちの憧れの的であった。私たちは思いがけないサプライズに驚いたものである。親父さんの気前の良さを讃えてから、青く小ぶりの実の皮を剥いた。

浜みが強く、ふわりと甘かった。

親父さんは灯籠作りの最中である私たちに激励を飛ばしながら、子供達の作業を覗いて回った。すべての灯籠の完成を見届けると、近くの子供の背中を叩きもう一つバナナの実を渡して、気分良さそうにその太っ腹を揺らしながら帰って行った。子供達も、散り散りになって夕暮れの中を帰って行った。

明日という日は、綱引きの当日である。胸が高鳴った。

夕方、行進を始める前に公民館に集合した。私は先頭を務める。行列を先導し、浜へ誘導しなければならぬ。

道筋は全て覚えていたが、鉦を打ちつつ踏み出す足の、持って行き場に少し迷った。鉦の音に合わせた掛け声が、背後をゆっくり追ってくる。

手に手に灯籠を持った子供たちの行列が足並みをそろえる様は、日の暮れかけた部落の風景に映えたことだったろう。私は自分の務めを果たすのに精一杯でそのことには考えが至らず、ひたむきに前のみ見つめて歩いた。

日が暮れる。

行列が浜に至ると、据え置かれた縄の周りに灯籠を立て、灯りにした。それだけでは足りない

ので、高電圧の裸電球をぶら下げて浜を照らした。

群衆がアガリとイリの二手に分かれる。アガリとイリとは日の上りと入りに由来する古語で、東と西を意味した。要は部落の住所ごとに分かれた。

私はアガリである。相手側に回った友人と、勝敗にチヨコレイト・バーを一本賭けていた。

負けたくない理由があつたから、私は奮つて縄を握りしめた。

手元にあと何セント残つていたか知れない。他人に菓子を奢つてやるほど、小遣いに余裕はないのだ。

全員が縄を掴むと、緊張に微笑んで相手の陣営を睨む。

静けさが広がった。皆相手を出し抜いてやろうと考えている。

だんだんと、縄が揺れだした。アガリもイリも、相手の陣営を睨んだままで、息を合わせて縄を揺らしている。それほど大きな体軀ではなかったから、私の体も大縄につられて揺れた。

揺れが大きくなる。そろそろ私の体勢の維持が難しくなってきた時、銅鑼の音が大きく鳴り響いた。綱引きの始まりである。

全員が一斉に縄へ握力を込め、重心を後ろへと倒した。掛け声を合わせてリズムを揃え、体を前後に動かし、縄を引く力に波状の強弱をつける。

砂浜では踏ん張りが効かないために、地を踏み直す足が砂を蹴り上げ、誰もが沢山の砂を被った。

私も、縄を引く群衆でもみくちやになりながらも、声を張りつつ引き続けた。

数十秒で決着した。我らがアガリ陣営はタガが外れたように大きく後ろによろめいて、全員がいつぺんに尻餅をついた。大縄を引ききつたのである。

相手陣営を見ると、前のめりに倒れてしまったものや、

「ヤラレタ、ヤラレタ」

と笑いながら悔しがる大人たちが、砂まみれで起き上がっている最中であつた。

勝ち星を上げた私は大満足で立ち上がり、砂を払うと、例の友人にチヨコレイト・バーの約束を確認するべくその姿を探した。

しかし、その姿を見つける前に、今にも泣きべそをかきそうな顔をした弟がこちらに向かつてくるのが目に入った。

草履を失くしたとのことだつた。綱引きに夢中になるあまり、履いてきた草履をもみ合いの中に忘れてきてしまったらしい。

一応自分で探してはみたのだろうが、どうしても見つけられず、為す術もなく兄の私を頼つてきたのである。途方に暮れた顔で、私と一緒に探して欲しいと頼んだ。

少し気だるく思つたが、手伝つてやることにした。まだ綱引きの興奮は冷めやらず、賑やかだつた。すでに日は沈んでしばらく経ち、暗い。片付けられる気配のない裸電球が煌々と辺りを照ら

していたが、たくさんの人影が浜に落ち込み足元を覆っていて、草履を探して回るのは難しかった。

少し遠くで歓声が上がった。

誰かが、

「アオガミが揚がってきたぞお」

と叫んだ。海亀である。この浜には海亀が産卵に来る。

この貴重な場面に立ち会おうと、大人も子供も大急ぎで声の元へ駆けていく。

私も気になって、ちらりちらりと視線をよこしたが、弟がベソかき顔で念を押すような表情をしたので、それだけにしておいた。

足元にはかり視線を落として歩き回っていたから、走り寄る人と何度も衝突しそうになった。

見つからない。この喧騒の中では、これ以上探すのは困難だと思った。

そうでなくとも、綱を引くのに皆が浜を踏んだり蹴ったりしたのだ。おそらく、柔らかい白砂は掘り返され、巻き上げられて、草履は埋もれてしまった可能性が高かった。

そうであるとすれば、今見つけ出すのは不可能だろう。弟にそう言った。今日は帰って、明日、日が昇ってから出直すべきだと論じた。

しかし、弟は今度こそ泣きベソをかいて大きくしゃくりあげながら、家に帰る前に、今のうち

に探し出したのだと駄々をこねた。

「あの草履はぼく、んじゃなくて、お父ちゃんの草履なんだよう。

持ち出したことがわかれば、きつとひどく叱られちゃうよう。

帰らない間に見つけたんだ。おにいちゃん、お願いだよオ」

草履を失くしたくらいでよくもこんなに泣き喚くものだ、と不思議に思っていたら、呆れた事情もあつたものである。

行列参加に間に合うように急いで出かけたものだから、確認も取らずにつつかけた、ひとの草履のぶかぶかも気にせず、ちゃっかり綱引きにまで履いて参加していたのだ。

その上、踏ん張るのに邪魔だからと、どこで脱ぎ捨てたのかも定かではない。

私は大役を終えた後で疲れていた。これ以上弟に振り回され、砂を掘り起こして草履を探すのは骨だつた。

楽しみにしていた綱引きの余韻を、台無しにされたくなかつた。友人にチヨコレイト・バーの約束を確認させて得意顔をしたかつた。せつかくの海亀への好奇心を邪魔されて不満でもあつた。

それらの思いが、積乱雲のように黒くモクモク広がって苛立ちへと変わった。これらの感情を弟にぶつける理由は既にある。この身勝手な弟の振る舞いを、兄として叱らねばならない。これは腹いせではない。

私は小学生の足りない語彙で弟の非を責め立てて、これ以上草履探しを手伝うことを拒絶した。追いつがってくる小さな体を突き飛ばした。

「お父ちゃんに言っただけでやるウ」

と弟は大泣きで言った。

私は弟を殴った。

私はなるべく弟が視界に入らないようにして、綱引きの余韻の残る場を楽しもうとした。子供達の花火に参加した。

私が花火に火をつける間も、弟は草履探しを諦めなかったようだ。名も知らないおばさんに慰められている姿を見たような気がする。

私は構わずに、花火の後も友人たちと影踏みをしたりして遊んだ。

幕引きである。片付けもそこそこに、誰もが宵闇を家へと帰って行く。私はまだ残っていた。

あの海亀は長いこと後ろヒレで砂を掘り返していたが、すでに涙を流して産卵を始めていた。私はそれをずっと見ていたのだ。

丸い卵がぼろりと産み落とされるたびに、涙が砂まみれの顔に筋を引いて落ちていく。なぜ泣くのか、知らなかったから想像した。

我が子が受ける苦難を思い泣くのか。自然動物も親子の愛情を抱くものか。

そこまで考えて、しかし私には、産卵の苦痛に涙しているように見えた。ただ泣くほどに痛いのだ。一つ産み落とすたびに海亀は体を震わせる。

感情など挟む余地もなく、身体の痛みに涙しながらそれでも卵を産むのをやめないのは、やはり親の愛ではないか。

美談は月夜の海亀にとても似つかわしく思えた。しかし、目に溜まった涙は粘り気が強く、私はその涙に多分に生理的な印象を持った。少し痛ましいとも思った。

気がつくくと一人であった。一緒に海亀を見ていたはずの友人はすでに帰ってしまっていて、夜の浜に残った者は私だけである。慌てて腰を上げて砂を払い、一人で帰路に着いた。

両親が心配しているだろう。急いで家に帰って父に海亀の涙の理由を聞こうとも思った。父は物知りである。

家に帰ると、先に帰っていた父母がおかえりを言ってくれた。特に怒った様子もなく、遅くまで何をしていたのか聞いてきた。

それに私が答えるよりも早く、父が一緒にいたはずの弟はどうしたかと聞いた。

途中ではぐれて、わからないと言った。そのうち勝手に戻ってくるだろう、とも。

両親はそのような答えでは満足しなかった。心配した。

夜も更けている。子供が一人海辺に残るのは、当然気がかりなことであつた。どうして弟のそばにいてやらなかったのかと母が私に問い詰めた。

私としては、頭を殴つてやつて以来その姿を視野の内に入らないようにしていた弟だから、二人の心配そうな様子を見ても苦々しく感じるだけであつた。生返事ばかり返した。

「浜に探しに行こう」

私の表情に何か悟つたのだろう。父は有無を言わせない口調で私を連れ出し、夜の浜へ出ようとした。

草履がない。不思議がる父に、私がボソリと弟への悪態をついた。

父は下駄箱を探す顔をこちらに向けずに動きを止め、

「急ぐよう」

とだけ言つて代わりの靴を取り出した。

月が大きかった。海に月影がぼうつと浮かび、ゆらめいている。浜は静かで、波の音だけが響いていた。

父は時折大声で呼びかけながら弟を探す。私はその後ろを黙つてついて行く。一声も呼びかけ

をしなかった。

父が、涙で何をしていたのか聞いた。綱引きの勝敗はどうだったか、行列の先導はうまくできたか。私は少しずつ答えた。

父は静かに聞いていた。聞き上手である。私は話しているうちに今の状況を忘れて楽しくなつて、先導役を立派に務めたこと、友人との賭けに勝つたこと、花火のこと、海亀の産卵に立ち会つたことなど、いろいろな話をした。

父は相槌を打ちながら穏やかに聞いていた。いつもの優しい様子であった。

その穏やかな様子のまま、質問をしてきた。私の話の中に一切登場しない弟の、様子はどうかかと。

私はあからさまに黙つた。

「あいつにねずみ花火を持たせると、火をつけても放さずに持っているから危なっかしいね。今回は大丈夫だったか」

見ていないからわからないと答えた。

「いつはぐれた」

どうにも言葉が出なかった。

黙つて二、三步歩く。

「ケンカしたのか」

言葉にならない声で唸った。

「説明してみろ」

私は弟が父の草履を勝手に履いて綱引きに参加し、よりにもよってその草履をなくしたのだということを説明した。

さらに、意地汚くも最後までそのことを隠すために、私に詳細を話すことなく草履探しの手伝いをさせたことを暴露した。

弟を殴ったことは黙っていた。

歩きながら、父は穏やかに聞いていた。

一通り毒を吐くと、私はそれ以上続けられずに黙った。

父の様子は綱引きや海亀の話を知っているのと変わらないのである。私は毒気を抜かれて口を閉じてしまった。

見計らってか、

「お兄さんだろう。手伝ってやればよかったじゃないか」

と父は言った。声色が悲しそうであった。

「悪いことを叱るのは父さんの役目だ。お前は、弟が困っていたなら、助けてやらなきゃいけないよ。兄弟なんだ。弟を大切にしないか」

私は砂を蹴りながら、でもあいつが悪いなどと会話になっていない答えをした。

弟は見つからない。浜にはもういないのかもしれない。

海亀は、最後に見てから幾許も経っていないのでまだ産卵を終えていそうにないと思ったが、不思議とその姿は消えていた。

月明かりの中に二人だけだった、

防風林を隔てた海岸沿いが部落である。民家が寄り添って並んでいた。

弟の居場所の見当をつけて、車が一台通るのがやつの狭さの表通りを探した。この先にいつも遊び場になっている空き地がある。

いつもの空き地には、誰が建てたのかわからない寂れたバスケットゴールが立っていた。メッシュがズタズタに破けて垂れている。その下に、弟が顔を膝に埋めて座っていた。

裸足である。草履探しは結局うまくいかなかったらしい。あらかた父にどう顔向けしていいかわからず、家に帰るのが億劫になつてずっと座っていたのであろう。

馬鹿らしいことだと思つた。

父が側によって、声をかけた。どうして家に帰らなかつたのか、聞いた。弟自身の口から聞く必要があつたのだろう。私は、なんとなくそれが不服だった。

弟は泣き痕のある臉にまた涙を溜めながら父を見ている。

何も言わない。

ついさつき自分もそうだったくせに、私は何もしゃべらない弟に無性に腹が立った。

父はやはり穏やかな様子で慰め、しかし厳格に、話を促した。

弟はしゃくり上げつつ、私の方をちらりと見た。その視線は私を責めているように感じられた。

弟は何か話をする前に立ち上がって、父に手を引かれて歩き出した。私も、父を挟んで反対側に並んで歩いた。

父と弟はずっと話している。

まだ小さい弟には、家に帰らなかった理由をごまかすことはできない。それに、父の声の硬さがそれを許さなかった。

ポツリポツリと自分のしたことを話す。父は黙って聞きながら歩いていた。

私は二人にやや遅れながら、外灯から伸びる長い影を見つめつつ歩いた。先に行く二人から伸びる影が、外灯に追われて夜道に溶けている。私は二人の会話をろくに聞いていなかった。

もう我が家が見える。

何を話していたか知らないが、しばらく泣いた弟の、しゃっくり混じりのゴメンナサイが聞こえた。父が抱き寄せて、二人の長い影が一緒になる。

隣家のバナナの木がざわめいた。

私は蚊帳の中で横になりつつ、眠れないでいた。

弟は帰ってくるなりすぐに寝た。泣き疲れていたのだろう。

母は心配の杞憂に安心して、布団を敷いてくれた。しばらく父と話していたが、そのうち私や弟妹の顔を覗いて頭を撫で、弟の横に寄り添って寝た。

父は起きていた。蚊帳の外で座って外を見ていて、動かない。私からは父の背中と月と防風林だけが見えた。

振り向いた。私は父の背中を見ていたから、視線があって父の少し驚いた顔を見た。

「眠れないのか」

私はのそのそと布団から這い出て、蚊帳をまくり外に出た。開け放たれた窓から風が吹いて涼しい。父の隣に並んで、縁側に腰を下ろした。

静かに、とりとめのない話をした。

聞きそびれていた海亀の涙の理由を聞いた。父は、私でも思いつくようなありきたりな美談でごまかすことなく、なぜなのかわからないと答えた。

月が明るい。

「どうして喧嘩するまで話がこじれたんだ」

聞きたかったのだろう。私もいつか聞かれるだろうと思っていたから、この話題は唐突なものではなかった。しかし答えづらい。

私にもよくわかっていなかった。

「あいつが父さんの草履を履いていったって、それはお前が怒ることじゃないよ。何か他の理由があったのか」

答えられなかった。

大した理由ではなかった気がした。しかし私は弟を突き放したのだ。私が弟の最後の依りしろかもしれないなかったのに。

「弟を大切にしない。」

聞いたことをまた言った。

「父さんにも兄弟がいたんだ。お前くらい歳の時は、父さんも弟とケンカしたね。兄さんは歳が離れていたからそんなことはなかったけれど。」

今度は聞いたことのない話だった。父は普段、自分が子供の頃の話をしようにとはしない。

「弟は、ちゃっかりしたやつだったね。父さんも子供だったから、自分より世渡りのうまい弟のことが気に障ったものだった。」

「甘え上手というのか、ともかく父さんよりも人にちやほやされているように感じていた。本当はそんなことはなかったんだと思うけどね。」

父は穏やかに、むず痒そうに、昔を懐かしみながら私に思い出を語った。父にも子供の時代があったのだ。興味深い話題に、当然私は耳を傾けた。

思い出を語ってくれた。水牛に引かせたさとうきびの絞り機に手を巻き込まれそうになった話や、バレーボール大会で一等賞をとった話を聞いた。

しかし少年の父が生きた時代は、戦争の世紀であった。

父の父、つまり私の祖父は中学校の教師だったという。国語を教えていた。今思うと、その時代の教師がどのような思いで国語を教え、学生たちに何を語ったのか非常に気になるところであるが、父はそのことについて話さなかった。

聞く機会もなかっただろう。祖母と共に沖縄の地上戦で行方が分からなくなった。

父の兄については詳しく聞かされていない。優しく、滅多に癩癩を起すことがなかったと語ってくれたが、それだけだった。

あまり関わることがなかったのかもしれない。徴兵され、遠い東南アジアの戦地で戦死したらしい。

父とその弟は、十・十空襲の後、沖縄戦が激化する前に学童疎開で台湾へと渡っている。

対馬丸事件の噂が囁かれ、多くの人々が疎開船に大きな不安を持っていた。しかし、空襲で沖

繩が戦場になることを確信した県民は、多くの子供を内地や台湾に疎開させたらしい。父もその疎開学童の一人だった。

疎開船は大きかった。父をはじめほとんどの学童たちはこのように大きな船に乗るのは初めてだったから、まるで遠足にでも行くかのようににはしゃいで乗り込んだ。

船倉には窓がなく、無骨な階段が一つ甲板へと伸びるだけだった。そこに千人もの子供や婦女性が乗り込み、ひしめいている。

長い台湾への航路中、児童たちの船内での過ごし方は様々だった。

思い思いに、一晩中寝ずに騒いだり、乗組員に海戦の話をねだったりしていた。父は弟を連れて熱く息苦しい船倉を出て、甲板で護衛艦を眺めて過ごした。

台湾で、製糖会社の下働きをして暮らした。

明糖倶楽部と呼ばれた社屋で集団生活をした。地区ごとに一緒の社屋に落ち着き、顔なじみと過ごしていたのでいくらか気分がまぎれた。

学校もあった。沖縄の国民学校と変わらない授業を受けることができたが、空襲警報のたびに慌てて防空壕に退避したので落ち着かなかった。

毎日のように警報は鳴った。歩いている途中に空襲警報がなると、通学路沿いにたくさん掘られた人が一人入るだけの塹壕へすぐに飛び込んだ。

防空頭巾がないと、先生に死ぬ気かと怒鳴られた。

しばらくすると、父と弟は地元の農家の家を借りてそこで暮らすように言われた。

家主は親切で、田の農作業を手伝えれば米を食わせてくれた。他の学童より恵まれていたという。この頃にはもう製糖会社も操業しておらず、学校にも行けなかった。結局この家で終戦を迎えた。沖繩はもう全滅して、皆殺しの目にあつたと聞いた。父母、叔父叔母、祖父母もみんなもう会えないものかと、ぼんやりと考えた。

八月十五日に、学校へと来るよう連絡された。学童は校庭に集まり、校長先生が持った小さなラジオで玉砕放送を聞いた。

誰も何も喋らなかつた。

台湾の人々は、日本の敗戦がわかると態度を一変させた。地元の子供たちは日本人に、国へ帰れと石を投げた。

沖繩の出身者はリュウキュウレンと呼ばれ、日本本土からの疎開学童ほどには強く言われることはなかつたらしい。それでも、日本語の教科書を破られたという。宿先の家主が良心的であつたことは、大きな救いだった。

父と弟は、二人のみで身寄りもなくなつて、それでも必死に生きていこうとした。

しかし、すでに日本本土からの配給は途切れて食料は不足し、衛生も十分ではなかったのである。弟は幼く、この過酷な生活環境に耐えられなかった。

マラリアを患った。

体が弱って栄養不足に陥った子供は、同じように次々とマラリアに感染していた。誰もどうすることもできなかった。

高熱を発してガタガタ震えている弟に、父は何もしてやることができなかった。

か細い声で、

「寒いヨオ。お母ちゃんに会いたいよお。」

とばかり言った。

やせ細って骨と皮ばかりなのに、不気味に下腹が出ていた。

開くのも億劫そうな臉に、目ヤニがたまっている。

抱き寄せた体は火のように熱く、なでた頭の毛が抜け落ちた。治療してくれる医師も、薬もなかった。

せめて栄養をつけさせようと、バナナの房を盗んできて食べさせた。少し目を開いた。弱々しく喜んで、泣いた。

「おいしいよお、甘いよお。お兄ちゃん、ありがとうオ。」

それから三日後の朝、弟は起きなかった。

父は一人で、亡骸をバナナの木の根元に埋めた。バナナをあんなにも嬉しそうに食べたのだから、せめて天国では、たらふく食べて欲しかった。

従兄弟のついで、なんとか父は沖繩に帰ることができた。家族は皆、地上戦の混乱の中で行方が分からなくなり、父のもとに戻ってくることはなかった。

父は話していて明らかに辛そうだった。沖繩に帰ってきてからも身寄りなく、一人きりで苦労したのである。私は何も言えずに聞いていた。悲しいというよりも怖かった。

父は静かに震える私に振り向き、目を真っ直ぐ見据えて、

「だからお前は、お前こそは弟を大切にしないさい。弟妹たちを大切にしないさい。父さんはやりたくてもできなかったんだ。お願いだから、お前たちは皆仲良しに生きてくれ。一人はとても、とても辛いよ」

と、震える声で囁いた。

私は声を立てずにただただ泣いて、呼吸が苦しかった。なぜ泣いてるのかわからなかった。潰れてしまいうさだと思っただけ。

弟の安らかな寝息を、聞いたことのない奇怪な音だと感じた、

「遅くまで話しすぎたね。もう寝なさい」

と言って私を蚊帳の中へ入れた。父も布団にもぐってすぐに眠った。話し疲れたのか。

私は眠れなかった。隣家のバナナの木だけが目について、叔父の眠る台湾のバナナの木を思った。会ったこともない叔父の、やっとバナナの実を噛む弱々しい笑顔を想像して、その顔をあの自分勝手な弟の顔でしか思い描けず、恐怖を堪え切れなかった。

どうしようもなく辛くなつて、この恐怖が何なのかわからなかった。私が考えてもみなかった、身近に訪れる死を、父はあんなにも苦しい形で体験していたのだ。

父は痛みに顔を歪めていた。私はその表情を見た。その父の瞳が私の姿を捉えていないことに気がついていた。

涙がとめどなく溢れ、声を上げると誰かを起こしてしまいそうで、理由もわからずただ黙って泣いた。

いつまで泣いていただろうか。疲れた。

もう何も感じなくなかったのに、感情が胸の中でドロドロリと渦を巻いて吐きそうだった。

目を開けると、軒下からバナナの並木がざわざわと音を立て、月下を蠢いているのが見えた。月明かりが照らす青い莖には粒状に整列したたくさんの実と、紫色の花の残骸が内臓のように

垂れ下がり、葉は葉脈に沿ってズタズタに破れている。私の目にはグロテスクに映った。

いつか見た資料写真の、ポロポロの着物を纏い、目に蛆を湛えて横たわる地上戦の犠牲者の姿に見えた。

私は再び起き出して、蚊帳を這い出た。

あの木をどうにかしないといけないと思った。

誰も起きない。足音を立てずに玄関まで歩き、靴を履いて、外に出た。

離れの倉庫に、鋸がある。月明かりを頼りにそれを見つけ、錆び付いていないか確かめた。使いは習って、知っている。担いで家を出た。

隣家の門は開いていた。部落の家々は大抵、無防備だった。忍び込んで、バナナの木を見つけた。青い房がたくさん実って、影を落としている。

切り取って熟成させれば、甘くなるだろう。青いままでは渋みが強い。

きつと、叔父が食べたバナナも渋かったことだろうと思った。

迷わず幹に鋸を当て、引いた。柔らかく、押し引くごとに簡単に刃が食い込んだ。感触が心地よいほどだった。

鋸を引くごとに葉が大きく揺れて、ざわざわと音がする。すぐにメキメキと軋んで倒れだした。

何とも思わなかった。すぐに次のバナナの木の幹に鋸を当てた。

翌朝、すぐ騒ぎになった。

バナナの木が根こそぎ切り倒され、もう実は望めない。

勘の良い父は、すぐに昨日私に話した内容を鑑みたのだろう。私を問い詰めた。

私が否定せずに打ち明けると、大きく声を荒げて私を怒鳴り付けて、一人で隣家へ謝ってこいと命じた。

言う通りに謝りに行った私は、正直に桜の木を切ったワシントンの逸話のようにすぐ許されはしなかった。

当然、隣家の太っ腹のおじさんは顔を赤くして激怒した。

ひどく叱られて、それでも理由を聞こうとする優しい親父さんに私は何も答えることができず、やはり泣いた。

帰って、母に説教を受けた。他人のものを傷つけてはいけない。誰もがわきまえるべき道徳だ、と。そんなことはわかっていた。

父はもう怒鳴ることはしなかった。ただ悲しそうに、なぜかと聞いた。

叔父の墓標をなぜ倒したのか、父に聞かれることはとても恐ろしいことだと思った。

自分が死ぬことへの畏れではない、純粹な死の事象への恐怖を、私は直視できなかつた。父から死の臭いがした。

質問に答えることなく、私は家を飛び出して、浜を逃げるように走った。

何も見えておらず、砂地にあつた窪みに足を取られて転んだ。

右足の先が生暖かく感じた。見ると、足は砂と何かどろりとしたものにまみれていた。

白く弾力のある殻が割れている。

この窪みは昨晚海亀が涙を流して掘つたものだと思ひ当たり、自分が何をしたか悟つた。

死が臭うのは、私の右足だつた。

私を頼つた弟を、殴つたことを思い出した。

海亀の沈痛な涙が脳裏をよぎつた。

ふと、切り倒したバナナの木が、生き物であつたことに気づいた。

どうすればいいのかわからず、泣きながらその場を離れて砂に足を擦り付け、卵のぬめりを取ろうとした。

血がにじむまで擦つても、まだ生暖かさが右足の先にまとわりついていて感じるように感じた。

窪みにたくさん砂をかぶせて、割れた殻を隠そうとした。

しゃがれた小さな声で、早口に「ゴメンナサイと唱え続けた。

砂を蹴る音が近づいてきて、父が後ろから私を抱きしめた。力強く、砂を抱き集めようとする私の動きを止めて抱擁した。

私は父に感情をぶつけた。死が怖い。誰かが死ぬことが怖い。戦争が怖い。僕が死なせた。いつか死ぬのか。

この脈絡のない独白に、父が何を理解したのか知らない。だが、今の私の恐怖を真に理解し得るのは父だけだった。

「お前は未来に生きていいんだ。お前が怯えているのは過去だ。お前は見なくなっただけいいんだ。その上に立って生きればいい。」

と耳元に強く囁いて、肩を強く掴んだ。

大声で泣きわめいて、何度もごめんなさいと言った。

「誰のせいでもないよ」

その言葉で、もう泣くだけでよかった。

「お前が生きているのは、みんなが生きていたからだ。お前だけじゃない。みんながそうだったんだ。」

弟が、おずおずと父について歩いてきていた。

「草履を探させる。今度は手伝ってやってくれ。」

父が弟に聞こえないようにつぶやいた。

私はもう泣かなくてもよかった。

積もる死の上に揺れる灯が、生きることだと知った。

石嶺 眞太郎（いしみな しんたろう）／琉球大学・工学部情報工学科二年

小説部門佳作

かなさ

山上 不動

それは、けだもの同士の喰い合いだった。

その人は、自分が妻として選んだ人の顔を思い切り殴った。

その人は、自分が夫として選んだ人を包丁で切りつけた。

絶叫と暴力と投擲されたゴミ箱やら椅子やらが飛び交うなか、幼き頃のぼくは震えながら、ただ、ぼくをこの世へ招いた二人の戦争を、両耳をふさぎ凌いでいた。

勉強机の下に隠れ、がちがちと歯を鳴らし、止めどなく涙を流しながら、ぼくは、ついに『愛』というモノの存在を信じなくなつた。

流血の赤。包丁の切っ先。割れた花瓶。知らん顔の灰皿。

どんなに忘れようとしても、脳裏にへばりついた悪夢は、変わらずぼくのころをおかしてゆく。だから。きっとそれは、けだもの同士の喰い合いだった。

咆哮じみた悲鳴を挙げて、ぼくは飛び起きた。滝の様な汗で顔を汚し、息を肩でしながら、ぼくは茫然として目の前の暗闇を凝視していた。ふと視線を逸らすと、時計の針は、午前五時を示していた。

「はっ、はっ、………はあ」荒い呼吸を整え、溜め息を吐いた瞬間、深い吐き気に襲われ、ぼくはトイレへ駆け出す。

大学三年生、ぼくこと仲宗根かなさが不登校となってから半年余りが経過している。

二年次で多めに単位を取得していたからまだ卒業には響かないが、就職活動においてはそれなりの不利を被ることになるだろう。

もつとも今となつては、それらすべてがどうでもよく思える。

ぼくは胃が空になったのを確認し、呼吸を落ち着かせつつ、口をふいたペーパーと共に吐瀉物を流す。暗澹たる思いでそれを見つめたあと、ぼくは部屋の電灯をつける。とても朝食をとる気持になれず、テレビをつけ、ソファに腰を落とし、ぼうつとしていた。

そして、それが今のぼくの生活のほぼすべてといつてよかつた。

ここ半年、扉の外があたかも別の次元に繋がっているかのように感じられたぼくにとって、世界とは、この六畳一間の部屋だつた。

それで充分だつた。

耳と目を閉じ、口をつぐんで、ぼくは世を捨てたのだから。

この発端は些細なことだつた。半年前、忌まわしき母親から、『会いたい』と記されたメー

ルが届いたのだ。

ひどく動揺した。足元がぐらついたのを確かに憶えている。

あの悪夢の日から、ぼくは叔父叔母夫婦のもとで生きてきた。

大学入学と同時に彼らの家から別居し、やっと過去を清算できたと思つた矢先のことである。

その頃、大学二年であつたぼくは、法学サークルに所属していた。

大学で初めて触れた法律の面白さに溺れたぼくは、没頭して勉強に打ち込んだ。同じ様な嗜好を有していた彼女と、ぼくが惹かれあつたのは、ある種必然だったのかもしれない。

ぼくらは同じときを過ごした。

楽しいときを、悲しいときを、辛いときを、喜ばしいときを。

異性と時間を分かち合うことが、こんな素晴らしいことであることを、二十年近くにもなつてようやく知つた。

ぼくは呪いに打ち勝つた。ぼくは、両親みたいにはならないんだ。

そんな確信は、実際には脆弱そのものだった。

母親からのメールが届いた日、ぼくは、激しく狼狽した。

恐怖した。顔も見たくなかつた。何より、もしあの人と再会すれば、自分がどうなってしまうのか想像もつかなかつた。

ぼくは僅かな願いをこめて、彼女に相談した。

父と母の刃傷沙汰から離婚、自分の恐怖に至るまで細部を打ち明け、ぼくは彼女の、そのひと

ことを待った。会わなければいい。そう言ってくれるのを願った。だが、その願いは虚しくも裏切られる。

彼女は、母の側に立つて、ぼくを責め立てたのだ。

——子供に触れられないことが、親にとつてどれほど苦しいか。

——大人になつたんだから、もう許してあげて。

論じて聞かせるような彼女の言葉は、ぼくには理解できなかった。

分らないんだ、彼女には。絶望的な気分で悟った。

自分の世界の全てであつた二人が、つい最近まで愛を誓い合つていた二人が、氣狂いの様に互いを排除すべく殺し合う地獄を。

あの狂気で満ちた時間だけは、彼女と分かち合えないんだ。

失望からか、落胆からか、いつしか口論となつていて。

熱を帯びた争いの中、ぼくは、氣付けば彼女の頬をはたいていた。

つう、と彼女の目尻から水滴がこぼれた瞬間、ぼくは、ぼくのなかの大切な何かが壊れたのを感じた。走り去つていく彼女の背を追うこともできず、ぼくはその場にへたりこんだ。

ああ。所詮、かえるの子は、かえるなんだ。

ああ。結局、ぼくはあいつらと同じなんだ。

彼女の柔らかい頬を打つた右手の感触が、その厳然とした事実を突きつけていた。

どれだけ逃れようとしても、その過去は、呪いの如くぼくへ追いつがる。決して逃れられはし

ない。なら、逃げるのもばかばかしい。

そうだ。どうして忘れていたのだろう。

気付いていたはずだ。愛なんてものは、この世のどこを探しても、見つかりはしないのだということを。

あの日から、大学へ登校するのをやめた日から、ぼくは彼女と会っていないし、メールも、ましてや言葉も交わしていない。

何度か友人達がこの部屋を訪ねたが、ぼくは居留守をきめこんだ。

そのうち愛想がつかたか、彼らも次第にここへ訪れることはなくなった。それでよかった。今は何も考えたくなかったから。

今のぼくの日課といえば、テレビを見ること、食べること、ぼうつとすること、風呂に入ること、眠ることが主で、建設的なことといえば法律関係の書籍を読むことぐらいだ。

法律の勉強は面白い。自分たちが暮らす社会の歯車がどのような構造になっているのかを知ることが、実に興味深いものだった。

ひと通り読んだ本から顔をあげ、一息つく。

こんな生活がずっと続けばいいのに、と思う。

俗世とは乖離された時間と空間。そんな中で労働につくこともなく趣味に興じていられるひとときは、あたかも極楽のようである。

一方で、ここが本当に『樂園』なのか、疑問に思う自分もいる。

今は叔父叔母からの仕送りで食っていけるが、ずっとおんぶにだっこ、というわけにもいかない。いずれ、この樂園は失われる。

そうと分かっているでも、ぼくは現実を直視できずにいた。

ブラック企業にでも、生活保護にでも、刑務所にでも、どうにでもなればいい。しつたこっちゃない。

何なら。いつか終わる人生、その終わりを多少早めようとも――

そんな血迷った妄想は直後、荒々しくドアをノックする音に遮られた。鐘でも鳴らすかのような勢いでノックされるドアは、ぎしぎしと悲鳴をあげている。友人か勧誘ならいつもみたく居留守を使おうと考えていた分、その事態は、真に以て突飛だった。なんの言葉もなく、馬鹿みたいな勢いで殴られているドアは、なんだか非常に不安をあおり、まるで犯した覚えのない罪を糾弾されているかの如く感じられた。段々と無視をするのが賢明とは思えなくなってきたので、ぼくは「い、今開けます」と声をかけ、恐る恐る扉を開けた。

果たして、三十代くらいの女性がいた。ぼくよりも遥かに長身で、彼女の着るスーツの襟には、金色のバッジが光っている。

女性は、その凛々しい顔立ちをほころばせ、こういった。

「初めまして、仲宗根かなさくん。末吉先生の紹介で伺った、行政書士の浦崎です。お日柄もいいので、一緒にお話ししませんか？」

末吉先生は民法の講師で、ぼくは授業中、幾度も質問をふっかけては彼を困らせたのを憶えている。彼とは民法について何度か議論を交わしたこともあり、講師の中では、最も気がおけない間柄にあった。行政書士を自称する浦崎綾さんは、彼からの相談で、ぼくのカウンセリングへ出向いたのだという。

当然、鵜呑みに出来る話ではない。精神科医ならばともかく、なんたつて法律屋がぼくの精神を癒しに来るといふのか。

「でも、駄目だったんでしよう。足しげくメンタルクリニックへ通つても、パニックはおさまらない、つて聞いたのだけど」

末吉先生の前よこした客人を無碍に扱うわけにもいかず、ぼくはしぶしぶ女性を室内に招いた。数ヶ月ぶりに他人と話をするので、多少どもりながら、ぼくは彼女の言葉に反論する。

「で、ですけど、PTSDの克服には、じっくりと時間をかけるべきだと聞くじゃないですか。しっかりと治す意欲を持つていれば、精神障害は治るつて——」

「そう。なら訊くけど貴方、ここから出るつもり、あるのね」

思わず、言葉に詰まってしまった。そこは「勿論です」とか「当然だ」といった言葉が出るべき場面なのに、ぼくの口は、意思とは関係なく、固く閉ざされていた。自分では気づいていなかったのだ。

ぼくの外への意欲は、まるで失われてしまつていたということに。

「やはり、自分で分かつていなかったのね」彼女は嘆息した。

「治らないではなく、治す気がない、ということに」

ぼくは浦崎さんを正面から睨みつけた。血のつながりもない赤の他人が、知った風な口をきくな。そう言外に非難したつもりだったが、猛禽の様な眼光の彼女は、ちっとも怯む気配を見せない。

「帰ってください。貴女にとやかく言われる筋合いなんてないし、法律屋なんか逆立ちしたつて
ぼくの精神を癒すことはできませんよ」

それはどうかしら、と彼女は肩をすくめて見せる。

「貴方を立ち直らせることが出来なかったのは、全て医学的見地に基づいた治療。それらが功を奏さないのなら、別の見地に立って治療を仕掛けてみる価値はあるはず。貴方、法律を専攻しているのでしょうか？なら、法学的見地に立った治療を試みましょう」

意味が分からない。そもそも法学的見地に立つ治療とは何なのか。

「貴方が心を病んだ原因は、両親の離婚。そうだったわね」

ぼくは押し黙り、こつくりと頷いた。

こうも人の痛いところを、有無を言わさぬ口調で問いただされるのは腹立たしい話だったが、彼女は至つて真剣で、少しもふざけている様子ではないため、こちらとしても真面目な応対しかできない。

浦崎さんは、ぼくの出した麦茶を飲み干したあと、明瞭に告げる。

「なら、貴方も分かるでしょう。離婚とは、立派な法律問題。法学的な視点から、この問題を分析することができるはずよ。法知識に人一倍明るい貴方なら、何か、妥当な決着を見出せるかも

しれない」

具体的にはインターンだけど、と彼女は快活に笑って説明する。

「二日間、私の事務所で研修をしてもらいます。わが法律事務所は、離婚をはじめとする家事に関わる問題を専門的に取り扱っているの。来週の月曜に二件、水曜に一件、それぞれ離婚に関する依頼を受けているから、貴方はそれぞれの日に出勤して、その一部始終を見届けてくれればいい。雑用をしてもらうけど、他にも幾つかの仕事も見せてあげる。どうかしら」

興味が惹かれないといえは、嘘になる。いつか就職するというのなら、自分の専門に関わる職を選ぶに越したことはない。そういった意味で、法律屋の仕事が見られるというのは好奇心をそえられる。

一方で、怖気づいている自分がいるのも事実だった。ぼくを一時、廃人同然にまで至らしめた、あの悪夢のような争いが、週に三度？

正気の沙汰じゃない。どころか、それを間近で見ようなんて。

今度こそ、手のほどこしようがなくなってしまう。

帰り支度を始めた浦崎さんは、ぼくの怯えを察したか、念を押してこう付け加えた。

「荒療治であることは承知の上よ。だから、強制はしない。決定権を有するのは貴方。期日は明日まで待つてあげる。私も、この方法が絶対に正しいなんて、夢にも思っていないから」

ただね、と帰り際、浦崎さんはぼくの両目を直視して、告げた。

「貴方はいずれ、この道を通る。法律職を志すというのなら、なおのこと。——ねえ、仲宗根か

なさくん。どんなときでも、今だからこそ解決できる問題があるのよ」

浦崎さんが帰っていったあとの室内は、静けさに拍車がかかったかのようだった。それだけ、多くの耳が無音に慣れていたのか、あるいはあの人の声量に迫力があつたのか。恐らく双方だろう。

コップを洗いながら、彼女の迫つた二択を考える。

インターンへ出向くか、出向かないか。

普通に考えれば、リスクが大きすぎる。親の離婚が原因で精神を病んだほうが、他人の離婚の進行現場に赴くのでは滑稽ですらある。

だが、彼女の言い分もあながち的外れではない。

浦崎さんの言う『法学的見地に立つての治療』とは、要するに、他者の離婚問題を実際に目の当たりにして、自分の過去と比べ、何か自己解決の鍵を見つける、ということだと思う。確かに、こんな機会はそのうそうないだろう。法律を専攻する身としても、願ってもないチャンスだ。しかし、無謀に過ぎる。誰が考えても明白である。

やはり、断るか。そう思うも、なかなか返事は決まらない。

——どんなときでも、今だからこそ解決できる問題があるのよ。

さきほどの浦崎さんの言葉がリフレインして、多くの思考をしつちやかめつちやかにかき乱すからだ。今だからこそ解決できる問題とは、後になつては取り返しのつかない問題とイコールである。

今トラウマを放置してれば、ぼくはきつと将来を損なうだろう。

溜め息をつきながら、自分の名前のことを思う。

『かなさ』とは、沖繩の方言で『愛』を意味する。

男の子の名前としては似合わないと言われてきたが、かつてのぼくはその名を、それなりに誇っていたつもりだ。

その名付け親たちが、互いへの愛を否定する日までは。

「……どうして、ぼくの名前は『愛』なんだろう」

ちっともその感情を理解できないのに、なんたつて両親は、こんな深い業をぼくに押しつけたのだろう。何も、何もわからない。

たったひとつ、分かることがあるとすれば。

この狭い世界に自分一人で考えあぐねていても、何ひとつとして分かることはない、ということだ。

二日後、ぼくは、浦添のはずれに位置する浦崎法律事務所へ訪れていた。キーボードのキーを叩く浦崎さんは、台所でお茶を淹れている。ぼくへ振り向くこともせず、ご機嫌そうな声で言った。「うんうん。やっぱり法学部の人間が、法律家の職場を見られるなんてチャンスを放棄できるわけがないわよね」

「あれ。ぼく、一度も浦崎さんを法律家と呼んだ覚えはないですけど。法律家と呼ばれるのは弁護士、検事、裁判官の法曹のみですよ。法廷に立てないのなら、法律屋で充分でしょう」

こちらを振り向いた浦崎さんの渋い面持ちに、ぼくは満足した。
好き勝手いってくれたお返しだ。

——行政書士とは、法律家の隣接職だ。大雑把に説明すると、法律関係の難解な書面作成の代
行を勤める『代書屋』である。

もっとも、訴訟の代役を勤めることはできないので、弁護士よりも比較的経営の腕を求められ
る職なのだが、なるほど、浦崎さんは中々の敏腕だった。パソコンで書類を作るものすごい速さ
もさることながら、その間、度々かかってくる相談の電話に対しても、片手間でありながら的確
に対応する。彼女の奮闘する姿に感嘆しながらも、ぼくは、なぜここまで大車輪になれるのか、
少しばかり、その情熱に違和感を覚えた。ぼくと面談をしたときもそうだ。

いったい、何がここまで彼女をつき動かすのだろう。

と、午後十二時を過ぎたあたり、一人目の依頼者が訪れた。

見るからにガラの悪い男だった。昇竜の刺繍が入った黒いジャージをまとった彼は、事務所内
でありながら煙草をくゆらせている。

男を認めた浦崎さんは、立ち上がって対面のソファへ案内した。

金城と名乗った男は、早々にこう切り出した。

「ここですら、問答無用で別れさせてくれるって聞いたんですか」

別れる？ そうか、離婚の相談か。やくざの依頼かと身構えていたぼくは、ここが家事専門の
法務事務所であることを思い出した。

「夫婦関係が破綻していると聞いていますが」

「そうなんですよ。もう付き合いきれなくてねえ。ちょっと女遊びをしただけでヒス起こすし、とつとと定職就けだのとわめきやがる。

沖縄の就職率の悪さぐらい知つていやがる癖に、性の悪い女だ」

だからね、ちょっと焼き入れてやっただけですよ。

愉快そうに笑う男だが、ぼくには笑いどころがまるで分からない。

「そしたらあいつ、壊れたみたいに泣き出して、お前を殺して死んでやるって、俺のゴルフクラブを振り回しながら叫びやがる。借金かさむなか手に入れた相棒を、ですよ。もう付き合いきれねえ。

なんとかしてくださいよ、法律家さん」

「承りました。そうですね、お子さんはいませんか」

ぼくから見ても吐き気を催しそうなひとでなしの男に、しかし、至って真面目に浦崎さんは相談を開始する。ぼくには、彼女の真意が分からなかった。なんで、こんな奴の相談に乗る。法律家は、正義のために働くんじゃないのかよ。こんな男、助けてやる価値なんかちつともない。きつと、奥さんのことを考えたこともないぞ。

そんな内心の叫びが届くはずもなく、肅々と法律相談は進行する。

「お子さんもおらず、奥さんの生活保障も充分であり、長い間別居している。そうですね」
「ええ。今は出会い系で知り合った彼女の家に住んでいるので」

承知しました、と聞きたくもなさそうに遮って、浦崎さんは再び笑顔を浮かべ、こう提案した。
「調停を終えているのなら、手っ取り早いのは裁判ですね。」

『婚姻関係が破綻し実体の伴わない婚姻を継続することが好ましくない』今回のケースは、有責配偶者からの離婚が認められる場合がありますので。難点があるとすれば、結構な費用がかかることです」

「いや、構いませんよ。今の彼女が公務員でね、家内と縁を切るならいくらでも出すって息巻いてるんですわ。そうだ、別れる際には慰謝料が取れたはずだ。その請求をお願いできますかね、

浦崎先生」

「内容証明ですね。かしこまりました」

後日の段取りを組み終えると、男は最後まで煙草を啜えたまま、満足そうに事務所から去った。

男が消え、二人だけになって、暫くしてからぼくは口を開く。

「なんで、あんな奴の相談に乗ったんですか。奥さんが不憫だ」

「依頼は依頼よ。仕事を選べるほど、私は偉くないの」

ぼくの言葉に取り合わず、さっさと彼女はパソコンへ向かう。

納得がいかない。こんなの、ぼくの目指すべき目標じゃない。

やはりここに来たのは間違いだった。遅すぎる後悔を抱きながら清掃をしていると、机の下から埃をかぶったペンダントを見つけた。

ペンダントには、十歳くらいの男の子の写真が収められている。

それを眺めていると、いきなり浦崎さんがつかみかかってきた。

「どこにあったの、それ」

つ、机の下です、と焦るほどの言葉に、浦崎さんは、酷く心を痛めた様な顔を見せた。ペンダントを受け取った浦崎さんは、落ち込んだ表情のまま、作業に戻った。

竹を割った様な性格の彼女が、ああも悲しそうな顔を見せたので、ぼくは動揺した。その表情の理由を尋ねる気分にはどうしてもなれず、無言のまま、事務所内の時間は流れていった。

二人目の依頼者が尋ねてきたのは、ぼくらが昼食を終えた頃。

下地と名乗る浦崎さんより少し年下の女性は、夫からの離婚請求に対し、息子の親権はどうなるのか、そういった内容の相談をした。

「お子様の年齢はおいくつですか」

「えーっと、七歳だったけ、八歳だったけ。そのあたり」

他人事の様に話す母親を、ぼくは怪訝に見ていた。だろう。

自分の、そんな幼い子供の年齢も分からないのか。どんな神経だ。

腕組みをした浦崎さんは、眉間に皺を寄せつつ、

「そのくらい幼い子供なら、大抵は母親に親権が認められますよ。

もっとも、貴女になんらかの問題があるなら話は別ですが。

失礼ですが、なぜ旦那様は離婚請求をなされたのですか」

女性は忌々しそうに溜め息を吐き、夫の愚痴をこぼし始めた。

「もう我慢できないの。彼とは高一の頃に会って十九で結婚したんだけど、もう、あの頃の、素敵だった彼はいないのよ。」

月の給料なんて十万ぼっちだし、コンビニの店員なんかロマンのかけらもないわ。バブルの頃はよかつたんだけどね。私、寂しかっただけなのよ。だから、職場の彼とちよつと友達づきあいをしただけなのに、旦那ったら『不倫だ』なんて大げさに怒るのよ」

さも同情を買えといわんばかりの口調だが、よっぽど彼女の夫に同情をすべきだ。要するに、若すぎるうちに結婚してやっていけなくなつたから、今の旦那を切り捨てようつて魂胆じゃないか。あんまりだ。窮地のなか支え合ふのが夫婦なんじゃないのか。

「その職場の男性と、再婚なさる予定なのですか」ふつふつと怒りをこみあげさせるべくとは対照的に、浦崎さんは冷静に応じる。

「そうしなかつたんだけど、旦那が彼に執拗に噛みついてね。私まで嫌われちゃつたのよ、いい迷惑だわ」

「そうなると、家計が困窮するのでは？」

大丈夫よ、と女性はとり澄まして言う。

「こういう場合は生活保護が受けられるんですよ。問題ないわ。」

友達もみんな、そうすべきだつて言っているし」

正直、ぼくは愕然とした。確かに、自棄になつたばかりも一度は考えたが、人の親が、ましてや母親が、こんなにあつさり生活保護を受けるのだと平気な顔で言い切れるなんて。恥も外聞もない。

県民の納めた血税が、こんな奴の為に使われているのか。

茫然とするぼくなど知らず、女性はいらいらと腕時計を見つめ、「遅い。幸助のやつ、なにもたついてんのよ」と吐き捨てる。

どうかしましたか、という浦崎さんの問いに、女性は、自分の息子にお使いを頼んでいたことを明かす。

ちょうど近くのスーパーだったので、ぼくが探すのを引き受ける。

果たして、幸助くんは、事務所から五十メートルほど離れた場所まで歩いてきた。たくさんの日用品の入ったスーパーの袋を担ぎ、炎天のなか、だらだらと汗を流しながら。

仰天してぼくはかけより、幸助くんの代わりに袋を持ち、道のりを引き返した。こんなにたくさんの荷物を、いたいけな子供に担がせるなんてどうかしている。憤るのを、しかしぼくは気ほども表面に出さず、幸助くんとは愛のない談笑をしながら並んで歩く。

お笑い芸人のことだとかゲームのことだとか、アニメのことだとかクラスの友達のことだとか、そんな話をしているときの幸助くんの笑顔は、とても眩しい、愛らしい屈託のないものだった。

両親間の争いにより疲弊しているであろう幸助くんを慮ったぼくは、なるべく楽しい話題を提供しつつ、牛の歩みで事務所へ向かう。

道程が終盤にさしかかったあたりで、幸助くんはぼくへ問う。

「お兄ちゃんたちは、僕をママの家の子にするの」

少しためらってから、ぼくは、正直な本音を漏らした。

「幸助くんは、どう思うの」

その後、ぼくは、自分の好奇心を制御できなかったことを後悔することになる。

太陽の笑顔は、一瞬で、がらんどろのような無表情に変貌した。

「ママも、ママを奪った男も」

みんな死ね。

確かに、彼は、そう呟いた。

心の傷が癒える気配はない。インターン初日の翌日、ぼくは、いつも通り自室にこもって膝を抱えていた。

——みんな死ね。

世界の全てを呪うかのようなあの子の言葉が、頭のなかをぐるぐる這い回っていた。あんな天真爛漫な子供に、それを言わせるのか。

「畜生、畜生、畜生、畜生」

もう嫌だ。何が法学的見地に基づいた治療だ。あんたのせいで、もうぼくには、世界が汚らしいものにしか見えないじゃないか。

何が愛だ。何が夫婦だ。嘘八百ばかり並べ立てやがって、お前らはみんな詐欺師だ。ぼくらは、みんな、うそつきだ。

人は愛だ、権利だ、自由だ、正義だのを謳うが、そんなものが存在する証拠なんかどこにもない。全部、

不存在を証明できないから仮に存在することになっている程度の脆く儂いまやかしだ。

全部うそなんだ。何もかも、うそっぱちなんだ。

頭を抱えて震えていると、携帯の着信音が唐突に響いた。ぼくは反射的に飛びついた。誰でもいいから、今は人の声が聞きたかった。

電話の相手は、末吉先生だった。陽気な声で、彼は訊いてくる。

『久しぶり、仲宗根君。インタビューはどうでしたか』

「冗談じゃないですよ。貴方の依頼のせいで、ぼくは生きる希望を限りなく失いました」
やっぱり酷でしたか、と末吉先生は少々悪びれて返す。

『申し訳ない。でも、浦崎さんはすごかったでしょう』

「……業腹ですけど。確かにあの人は、凄腕の仕事人でした」

『でしょう、でしょう。浦崎さんはかつて司法試験に挑んでいましたからね。法素養、ガッツ、共に並みではなし』

全く以て同感だった。しかし成程、司法試験落ちだったのか。

司法試験に受験制限が設けられてからは、脱落した者が司法書士や行政書士に流れやすくなった、という風聞は耳にしたことがある。

『大学院時代の同期でしょね。最近になって、彼女が家事専門の法務家を営んでいることを知って、彼女に依頼したんですよ』

そこで、ぼくは今日拾ったペンダントのことを思い出した。

「もしかしてあの人が、離婚していたりしますか」

鋭い、とまではいえないですな、と末吉先生。

『離婚を専門としている以上、離婚に何か思い入れがあるのは明白。ゆえに彼女が離婚をしているというその推理は、正しいですよ』

やっぱり。ぼくは、彼女の前の夫についても言及する。

『ええ、彼も大学院の同期ですが』

「そうか。じゃあ、その人が子供の親権者になったんですね」

浦崎法務事務所は、事務所兼住宅なのだが、浦崎さん以外の人間が住んでいる痕跡はなかった。だから、子供は夫の方が引き取ったものと判断したのだが、末吉先生は困惑した様にこう返した。『おかしいな。彼女の元旦那とは、今でもたまたまに彼の家で呑む仲なんですが、彼の家に、子供なんて住んでいませんでしたよ?』

……え? どういうことだ。あの写真の子供は、彼女の息子じゃないのか。それともぼくのよ
うに、親戚に預けられているのか。

どれだけ考えても謎が解ける気配はなく、夜は更けていった。

予報は大きく外れ、翌日の天気は荒れの一途をたどっていた。

インターン最終日の午後四時、浦崎法務事務所を訪ねたのは、新垣と名乗る痩せぎすの女性だっ

た。見るからに疲労を抱えており、両目のくまは深く刻み込まれたかのようだった。

というのも、彼女は女手一つで子を育てながら、男性とほぼ同じ様な肉体労働の職を転々としてきたらしい。資格もなく、また、それを勉強する時間もない彼女は、今日まで必死に生きてきたという。

「旦那様はどうなされたのですか」

対面のソファに座る浦崎さんの質問に、女性は酷く悔しそうに、

「四年前から、行方が知れないんです。夫は、青年海外協力隊としてヨルダンで建築指導を行っていたのですが、現地でテロに巻き込まれたらしくて。

遺体が見つからないので行方不明として処理されていますが」

今日まで音沙汰はありませんでした、と女性は泣きそうになって続ける。奥さんには悪いが、もう旦那さんは死亡したものとみて相違ない。何らかの借金があったわけでもなく、これまで順風満帆に生活できていたというのなら、故意に失踪する理由はないのだから。

「でも、私は夫を信じ続けてきたんです。絶対に帰ってくる。」

絶対に生きて、私たち家族のもとへ帰ってくるって、夢にまで見たんです。でも、それが正夢になることは、結局なかった。

夫なしで、家計を支えるのは本当に大変でした。いえ、私が苦勞するぶんにはいいんです。でも、娘の教育費を考えると、どうしても私の働きだけでは足りない」

「再婚相手の候補が、おられるのですね」

はい、と観念した様に女性は答える。

「今の職場にいる方が事情を知つて、結婚を申し出てくれたんです。今でも夫への愛がなくなつたわけじゃない。でも、このままでは娘の将来が危ない。……私は、不貞の女でしょうか」

浦崎さんは優しい微笑を浮かべ、首を横にふつた。

「今までよくお一人でがんばつてきましたね。そんな貴女の決断を尊重こそすれ、糾弾しようなんて旦那様はなさりませんよ。つまり貴女は、夫が行方不明の場合でも離婚が成立するか、ということが知りたいのでしょうか。もちろん可能ですよ」

はっ、と女性は顔をあげる。

「震災といった危難が生じてから、不在者の生死が一年以上判明しない場合、利害関係人の請求により失踪宣告が可能です。

不在者が婚姻をしていれば、死亡とみなされることにより、婚姻が解消されます。家庭裁判所への申し立てをする上で、必要な書類がいくつかありますし、その後の手続きも色々と煩雑ですので、こちらでサポートさせていただきますが、いかがでしょうか」

どうかお願いします、と新垣さんは深く頭を下げた。

そのときだった。ものすごい勢いで事務所のドアが開け放たれた。

そこにいたのは、制服を雨でずぶ濡れにした、中学生くらいの女の子だった。彼女は顔を怒りで真っ赤にして、新垣さんを見やる。

「何やってるの、お母さん。なんで法務事務所なんかにいるの」

新垣さんは、疲労で満ちた顔を更に狼狽で染めた。

「まさか、お父さんを裏切るつもりなの。やめてよ。」

お父さんは、いつまでも私たちの家族でしょ」

「さ、早苗。でも、貴女の将来のために必要な——」

うるさい、と早苗と呼ばれた女の子はすさまじい声で母を罵る。

「ふざけないでよ。私のお父さんは、世界にただ一人。」

誰が、お父さん以外の人間をお父さんと呼ぶもんか。

お父さんは、すぐに帰ってくるもの。絶対に、絶対に」

と、興奮する女の子をなだめる様に、浦崎さんが割って入った。

「新垣さんのご息女とお見受けします。」

父を思う娘として、貴女の言い分は至極真つ当ですが、お母さんの苦勞を理解していて、そうおっしゃるのですか」

ナイフの様に鋭利な視線で、女の子は浦崎さんを睨みつける。

「苦勞がなによ。私にとって、両親に代えはないもの。」

母でもない女を母と呼ぶ。父でもない男を父と呼ぶ。

そんなの、いびつでしょ。他人が首を突っ込まないでよ」

叫び吠える彼女の姿に、ほくは、自分の姿が酷く重なった。

けれど、浦崎さんの落ち着いた表情は微動だにしない。

「他人事で悪いけれど、貴女の言葉はただのわがままよ。貴女の親は全知全能の神様じゃない。人の子よ。貴女が親にどんな理想を抱いているか知らないけど、そんなものは傲慢を超えて甚だ幼稚だわ」

浦崎さん、と顔を蒼白にして止めようとする新垣さんを、彼女は手で制する。少女は、泣きそうになりながら金切り声をあげる。

「なんで。親は、子供の模範でしょ。なら、いつまでも子の理想であるべきじゃない。血のつながらない、他人じゃないんだから——」

「ああ。貴女、勘違いしているみたいね」

浦崎さんは憐れむように見て、最後の鉄槌を下した。

「親っていうのはね。血のつながった『他人』よ」

ひびが入った様な気がした。それは、明確な同一性の崩壊。

ぼくの目からみても可愛そうなほどうろたえた女の子は、一目散に事務所から飛び出した。

しまった、とつぶやいた浦崎さんは、初めて焦りを見せた。

「追って、かなさくん。さっき、暴風警報が出ていたの」

ぼくは慌てて事務所から飛び出した。吹き荒れる暴風のなかあちこちを走り回るが、早苗ちゃん姿はいっこうに見つからない。

一分も経たない内に、ぼくは髪の毛一本から爪の先に至るまで水浸しになっていた。飛んでくる石粒やガラスの破片は、それなりに殺傷力がある。それでもぼくは、全力で少女の姿を探し続ける。

あの女の子が、他人の様に思えなかった。あの子のいう通りだ。両親とは、かけがえのないもの。代わりなんていない。

あそこまで躍起になって反発するくらいだ、本当に、彼女は父親を愛していたのだろう。でも、このままでは家庭は成り立たない。

ならば、彼女の父親を見捨てるべきなのか？

わからない。ぼくには、ちつともわからない。

ぼくは、わけもわからず吹きすさぶ風雨のなかを走り狂った。

実をいえば、お父さんとの思い出は殆どない。だって、あの人が家にいたこと自体、数えるほどしかなかったのだから。

そんなお父さんのことが大好きだったのは、一重に、あの人が、そういう、どうしようもないお人好しだったからに他ならない。

貧しい人々の生活を、少しでもいいものにする事ができるのなら、どれだけ給料が低かろうが、どれだけ治安が悪かろうが、その身を投げ出すことを厭わない人だった。

最初は、本当に気に食わなかった。それはつまり、私たち家族のことよりも、別の国の人を大切しているということじゃないか。

そんな不満をぶつけたのが、私が小学校に上がる日の前日のこと。

私の入学祝いのために急遽帰国したお父さんは、一日中、近所の公園で私と遊んでくれた。ぎつこんばつたんとシーソーを動かしていた私は、同じく動かしている父に正面から訴えた。

——おねがい。もういかないで。さなえ、おとうさんがいなくてさびしいよ。おとうさんは、かぞくのことがいせつじゃないの？

父は面食らっていたが、気付けば柔和に笑っていた。

——大切だよ。何よりも大切だ。早苗とお母さんがいてくれさえすれば、僕は何もいらなかったね。

父は、燃え上がる夕日の空を見ていた。

あるいは、どこか遠い地で暮らす人々を想っていた。

——外の国の人にもね、家族はいるんだ。その人たちもまた、自分の家族のために、必死で生きている。そういう人たちのために、僕は生きたいんだ。こんなお父さんで、ごめんよ。

そういつて笑うお父さんは、なんだか、とても素敵だった。

その感情がなんなのか、よくわからなかったけれど、私は、お父さんがいなくても大丈夫な気がした。でも翌日にはもう家にいないと思うと、名残惜しくてしようがなかったのも本当だ。

ぐずる私に、お父さんは困りながら諭した。

——大丈夫、絶対に帰ってくる。ああほら泣かない。そうだ、早苗はもうお姉さんなんだから、お父さんと約束してくれるかい？

なにを、と問う私に、父は笑顔で答えた。

そこで、私の意識は覚醒した。雨が降るのも構わず、ベンチに腰掛けていた。前後の記憶が曖昧になっっている。

……そうだ。あのいけ好かない女の言葉が頭にきて、事務所を飛び出し、めちゃくちゃに走り回っていたんだっけ。

やけに懐かしい夢を見ていた気がする。何よりも大切な、お父さんとの思い出の記憶。それもすっかり色あせてしまっていて、最後に父が何を言ったのか、今はまるで思い出せない。

「やっぱり、ここにいたのね」

その言葉に、振り向く。案の定、母だった。

全身を水浸しにした母は、薄紫色の唇で忌々しそうに言う。

「お父さんとの、思い出の公園。来るならここしかないと思った。」

さあ、帰るわよ。これ以上人に迷惑をかけないで」

「嫌よ」私は母を睨みつける。

「どうせまた法務事務所へ行くんでしょ。死んでもここを動くもんか。私のお父さんは、世界に一人なんだから」

「いい加減にしなさい！」

今まで見たこともないような剣幕を露わにして、母は怒鳴る。

「もうお父さんはいないのよ。もういない人のことばかり考えて、自分たちのことをおろそかにしたら本末転倒でしょう！」

「こんなことになったのは、お母さんのせいじゃない」

私の言葉に、母の表情は凍りつく。

「お母さんが、お父さんを止めていたら、こんなことにはならなかったかもしれない。結局、お父さんを殺したのは——」

寸でのところで、私は言葉を呑みこんだ。言っている範疇を遥かに超えていた。しかし、私が何を言わんとしたかは伝わってしまったのだろう、母の表情はみるみるうちに色を失い。

「お、お母さん！ しっかりして、お母さん！」

崩れるように、母は意識を手放した。

市立病院に新垣さんが運び込まれてから三十分近く経過していた。

ぼくと浦崎さんが近所の公園に到着して目にしたのは、倒れていた新垣さんと、半ば錯乱状態の早苗ちゃんだった。二人を浦崎さんの4WDに乗せ、大至急病院へ直行した。母親を病院へ浦崎さんが担ぎこんでから、院内の待ち合い席にて、ぼくと早苗ちゃんは無言で待機していた。

毛布にくるまれた姿でぼうつとしてゐる彼女は、糸の切れた人形もかくやといった有り様で、正視にたえない。

「過勞、心勞。両方とも重度のものだったらしいわ」

戻つてきた浦崎さんは、ただただ辛そうに言葉を紡ぐ。

「きつと、必死だったのね。娘の将来のために、父親のいない分を埋めようと、身を粉にして働いてきたのでしょう。母親の鏡だわ」

称えるように呟いて、早苗ちゃんを見やり、語りかける。

「ねえ。確かに、貴女にとって、お父さんは大切な人なのかもしれない。でも、もう一人いるでしょう。貴女にとっての、大切な親は」

そういつて彼女が取り出したのは、二葉の書面だった。

「貴女が事務所を飛び出した直後、新垣さんから受け取つていたの。

貴女のお父さんが書き遣された、遺族への指示を記した書置きと、自筆証書遺言よ」

ぼくと早苗ちゃんは、共に瞠目して書面を見やる。

「どうして、遺書なんか」

「派遣先は、日本ほど治安の安定した国じゃない。もしものことを覚悟していただと思うわ」
そういつて、浦崎さんは遺書の内容をよどみなく朗読した。

——新垣道久が派遣先で消息不明となり、長期間が経過した場合、速やかに失踪の宣告を申し立て、死亡保険金を賄え——

——遺産の半分ずつを妻と子の相続分とする。再婚禁止期間は適用除外となるため、妻は宣告後、早期に再婚するよう努めよ——

その音読を聞いている内に、少女の顔色はみるみる失われていく。

「そんな……じゃあ、お母さんは、お父さんの指示で動いていたの」

「結果的にはね。だけど、彼女は夫をめぐり待っていたのよ。特別失踪は、危難が去ってから一年経過すれば申し立てられた。そうすれば、多額の保険金が手に入った。それにも関わらず、新垣さんは失踪から四年が経っても夫の帰りを待ち続けた」

そして、と浦崎さんは、遺書を掲げる。

「貴女のお父さんは、その遺産の全てを家族に捧げている。青年海外協力隊でも、海外の子供たちにもなく、貴女たちに。一部でも半分でもなく、その全てを、ね。その意味が、早苗ちゃんには分かるはずよ」

ぼくは、胸がえぐられるような気持ちになった。

少女の家族は、ぼくにとって、遥かに遠い理想のような存在で。

そしてその家庭は、彼女にとっても、過去系となってしまうた。

「遺書の内容は以上よ。あとは、貴女が読みなさい」

浦崎さんは強引に、茫然自失とする早苗ちゃんへ遺書を渡す。

少女に手渡された遺書には、最後に、こう記されていた。

『追伸　早苗へ。　約束だ。お母さんを、守るんだぞ』

それを見たとき、早苗ちゃんは息を呑んでいた。

そのとき、彼女の中で、確かに何らかのピースがはまっていた。

「あ、あ、あ。あああああああああああああああ」

くずおれた彼女は、頭を抱え、呻き続けた。

謝罪は言葉にもならず、涙と後悔だけが溢れて押し寄せる。

新垣早苗は泣き続けた。それしかできなかった。

六時をむかえ事務所のシャッターを閉めたぼくは、今までなら帰り支度をするのだが、今日は違った。

「かなさくんは、もう二十歳すぎてるでしょ。付き合いなさい」

ブランドーの酒瓶を手に、浦崎さんはぼくにグラスを渡す。

きついものは苦手なので、安物の缶ビールを注ぎお供することにした。乾杯をして早々に酒杯を叩る浦崎さん。かなりの上戸らしい。

「二日間の感想は、何かないの」

彼女のグラスにとくとくと注ぎながら、ぼくは曖昧に笑う。

「そうですね。なんだか、ぼくの日常とは別世界すぎて。」

とても、一言二言では済ませられないです」

ここを訪れた客たちのことを思う。

最低な人。身勝手な人。可愛そうな人。誇るべき人。

色々な人間の様々な事情を、第三者の立ち位置から客観的に俯瞰することで、ぼくは、自分はまだいくらかマシであること、今、このときを苦しんでいる人が、いることを知った。

「自分だけが不幸だと思っていた、以前のぼくが恥ずかしいです」
「でも、ご両親の喧嘩の末路は惨状だったと聞いているわよ。

流血沙汰だったのでしよう。貴方が心を病むのも致し方ないわ」
慰める彼女の姿はらしくなかったが、素直にぼくは受け止める。

酸鼻を極めた地獄絵図。決してなかったことにはならない。
すぎたことだ。だからこそ、鉛のごとく心に重い。

ぼくもまた冷えたビールを呷り、彼女と対峙する。

「最後に教えて欲しい。なぜ、貴女は離婚をしたんですか」

浦崎さんは大して驚きもせず、グラスを傾けて嘆息する。

「末吉先生の軽口ね。本当、あの人と秘密は分かち合えないわ」

どこか遠いものを見る様な視線の彼女は、簡潔に、こう答えた。

「私と夫が別れた理由は、私たちのせいで息子が死んだから。

そして、私が法務家を営む理由は、息子を死に追いやった、夫婦間の争いを根絶やしにするためよ」

それは些細なすれ違いだった。夫の給料が減らされたことで、他のバイトをかけもつようになり、

子供の面倒を見る時間が減った。

妻は怒った。妻は、司法試験の勉強にかかりきりで、仕事のことも考えると、時間はいいよない。夫もまた怒る。

勉強なんかやめてしまえ。いい年していつまで夢を見ている。もっともな言い分だったが、彼女は諦めることができない。

弁護士だった祖父に憧れていた彼女は、どうあつても夢を捨てることはできなかった。争いは坂道を転がる様に激化し、気付けば離婚が目前に迫る。けれど、それはできなかった。息子が、まだ幼かったからだ。子供にとって親というのは、二人いるのが当たり前だ。

片方が欠けて育った子は、どうしたって自分の生い立ちに遺恨を感じることになる。だから、二人は、子が成人するまでは別れないよう誓った。完全な善意から結ばれたその協定は、しかし、二人の思惑とは全く違う方向に働くことになる。

衝突を続ける両親。しかし、協定により、別れることはない。延々と繰り返される、終わりのない争い。

真綿で首を絞められる様な苦痛で満ちた毎日に、子は音をあげた。十二歳の誕生日、彼は二度と帰らない覚悟で家を出た。

親戚の家を当てにして夜の道を歩いていた彼は、酒気帯び運転で突っ込んでくるそのトラックに、最期まで気づかなかった。

「ええ、確かに一番悪いのはトラックの運転手でしようね。

でも、あの子の苦しみに気づけなかった私達が、根本の原因であることは疑いようがない」
疲れ切った表情で、彼女はグラスを置く。

結局試験は落ちたらしいが、無理もない。夫との争いに子供の死が続けば、誰だつて勉強する意欲など失う。

「辛かったでしょうね。悲しかったでしょうね。自分の世界の全てだった二人が、いつまでもいつまでも互いを罵り合うなんて。私達は、離婚自体が子供にとつて害になると思つていた。ともかく家族全員で生活していれば、あの子は健やかに育つと思つていた」

実際は違つた。見かけだけ家族で過ごしていても、子供の幸せにはならない。実体の伴わない家庭は、もうその時点で破綻していた。

「夫ともども、本当に後悔したわ。こんなことなら、早々に離婚するんだつた、つて。そして離婚したわけだけど、もう手遅れ。」

学んだのよ。別れるつてことは、場合によつては決して後ろ向きな決断ではないんだ、つて」
離婚から一年間、今のぼくのように彼女は引きこもつていたらしい。

ある日、ふと思つた。この経験を誰かのために活かせないか、と。

「それで、思い出したの。以前、司法試験の腕試しで受けた、行政書士の試験に合格していたことを。行政書士なら、離婚協議書の作成ができる。それに伴つて、夫婦のトラブルを解決できるかもしれない、つて。悪い伴侶に悩まされている人や、両親の喧嘩に苦しんでいる子供を『離婚』

で救えるんじゃないか、って」

そうか、合点がいった。初日、やくざの様な男の離婚請求に応じたのは、その彼女を男から切り離すため。二人目の客である女の依頼を受けたのは、両親の喧嘩で傷つく幸助くんの心を慮ったため。

「月曜日に来た不良が、離婚の請求をしたでしょう。事前に聞いていたんだけど、その奥さんが離婚を拒否していた理由っていうのが、『あの男だけ幸せになることが許せなかったから』らしいの。その点については逆恨みに違いはないし、彼女のためにもならないわ。」

あと、幸助くんのことだけでもね。あんな母親に、親権が認められるはずがないわよ。というか、私が認めさせるもんですか。

知人の弁護士に根回ししてでも、幸助くんの父親を勝たせるわ」

そう声を荒げる浦崎さんに、ぼくは、ほっとして笑う。

よかった。やっぱり、この人はいい人だった。

「確かに、沖縄の離婚率は日本一よ。県民の、離婚や生活保護に対する認識が軽すぎることもあるし、就職率が悪いこともある。」

一つの問題があるから、ではなくて、色んな問題が折り重なってこの現状がある。どれか一つを対策しても足りない。

全てを対策しなければ、この現状を良くすることはできない」
しみじみと語ったあと、浦崎さんは悲しげに笑う。

「失望させたかしら。私が、息子ひとり満足に育てられない母親だったってことに」
彼女の言葉に、ぼくは首を横にふる。

——どんなときでも、今だからこそ解決できる問題があるのよ。

初日の彼女の言葉は、ぼくだけでなく己にも叩きつけていたのだ。
自分が犯した取り返しをつかない失敗を、ぼくにさせまいとして。

「浦崎さんは、すごい人ですよ。貴女は、失敗を失敗として片づけず、誰かのためにそれを活かしている。ぼくをここへ呼んだのだってそうだ。貴女は、ぼくを助けるのに必死だった」

「違うわ。私は、依頼を受けたから貴方を案じたにすぎない」

「なら、なんであんなに必死になってドアを叩いたんですか」

……末吉先生が、貴女を選んでくれてよかった。貴女が助けてくれたから、ぼくは、自分の気持ちの正体がわかった」

小学校時代、両親に手をひかれている友達が、ぼくはひどく羨ましかった。あるべきかたちでなかったのが、悲しかった。

でも、あのまま二人が別れていなかったら？

あの、けだもの同士の喰い合いが無限に続いていたら？

ぼくは、下手をすれば、今以上に心を壊していたのではないか？

——誰かがいつていた。愛とは痛みであると。

誰かを好きになったとき、告白が失敗すれば痛みになり。

結婚後うまくいかず、途中で破局すれば痛みになり。

共に老い、片方が先立てば痛みになる。

結局、どのルートを選ぼうが、その先には痛みしか待っていない。

場合によっては、夫婦だけでなく、子にまで痛みは及ぶ。

絶望しか待っていない選択肢。ならば、ぼくらは『何も選ばない』という選択をするべきなのか？
違う。それこそ本当の絶望だ。

「ぼくは、怯えていたんです。二人の壮絶な仲互いを見て、もうぼくは、人を好きになることができなくなるんじゃないかって」

いつか壊れるのなら、どうせ傷つくのなら、もうそんなものと関わりたくない、そう思ってしまうことが怖かった。

「だけど、そんな痛みを知っているからこそ、強くなれる人たちがいることを知れた。もう、少
しだってぼくは怖くない。

ありがとうございます。

ぼくに、人を好きになることを、思い出させてくれて」

「……でも！ 私は、人を、息子を殺したわ！

母親どころか人間失格よ！ 私なんて、私なんて」

両手で顔をおおった浦崎さんは、いつの間にか声を震わせ、涙を流していた。男顔負けに気丈だった彼女が突然すすり泣き出したので、いささかぼくは驚いたが、すぐに理解した。

ああ。この人は、ずっと自分を許さなかつたんだ。誰か一人でも多く助けることで、亡き息子への罪滅ぼしにしようとしていたんだ。

だからあんなにもストイックになつて、仕事に没頭してきたのか。全て了解したぼくは、ただ黙つて、彼女の懺悔に耳を傾ける。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

繰り返される償いの言葉は、夜の静寂に溶けていく。

鉄の心の法律屋は、初めて、人に涙を見せたのかもしれない。

『「かなさ」という言葉には、いくつかの意味があるの』

午後七時。すっかり雨は晴れ、夜空は満天の星々に彩られていた。

別れ際、浦崎さんは歌うようにいう。

「愛しいって意味。もう一つは悲しい、つて意味。誰よりも悲しみを知っている貴方は、だから、こんなにも人に優しくなれるのね」

ありがとうございます、とぼくは少々照れ笑いで返す。

「あと、私、一つだけ嘘を吐きました。いえ、嘘つてわけでもないけれど、末吉先生が私に依頼したつて言ったの、おぼえてる？」

ぼくは頷く。あの暴力的な訪問は忘れようにも忘れられない。

「実はね。末吉先生は仲介しただけなの。」

実際に私に依頼したのは、法学サークルのとある女の子なのよ。貴方には、その子が誰なのかわかるんじゃない」

「あ……」

彼女だ。喧嘩別れになって以来、一度も会っていない彼女。そう、か。すっかり嫌われたものとふて腐れていたぼくのことを、未だ彼女は案じてくれていたのか。

考えてみれば、ぼくは、はたいたことを謝ってもいなかった。

「やるべきことは見つかったみたいね。じゃ、私の役目はこれでおしまい。何か質問とか感想はある?」

ぼくは口元だけで笑い、深々と頭を下げる。

「お忙しいなか、二日間お世話になりました。

貴女のおかげで、目標ができました」

目を丸くした浦崎さんに、ぼくは宣言する。

「貴女のような、法律家になることです」

驚いた表情を見せた彼女は、しばし閉口してから、微笑んだ。

「そう。悪いけど、百年早いわ。

だから、貴方はこれから百年分、一生懸命がんばって生きなさい」

『今はまだ会えない』

そう記された母宛てのメールを、ぼくは先日送っていた。

落胆するだろうか。でもそれが、今のぼくにできる精一杯だった。

何も返さないことの方が、よっぽど悪いような気がした。

まだ、心の整理がつかない。会っても、いたずらに痛みを生むだけかもしれない。あるいは、なんともないのかもしれない。

ただど待っていてほしい。いつか、必ず会えることを信じている。

目覚まし時計が鳴る。目覚めたぼくは、部屋のカーテンを開ける。

眩しい朝焼けが、ぼくともども部屋を眩しく照らす。

すべての細胞が歓喜する、この瞬間がぼくは好きだ。

納豆と共に食べる朝食のごはんとみそ汁が好きだ。

夜に浴びるシャワーの心地よさが好きだ。

あらゆる法律を勉強することが好きだ。

好きな人と一緒にいることが好きだ。

そして、それらは、生まれてこなければ知ることでもなかった。

例え何があろうと、永久にそれだけは、あの二人に感謝し続けなければならないのだろう。

自室を出たぼくは一路、大学を目指す。

母からの返事が来る前に、まずはやるべきことをしよう。

彼女へ、手を出したことへのお詫びと、心配してくれたことへのお礼をしよう。そんでなければ、あの人のような法律家になるどころかぼくは、一人前の男にさえ、なれないのだから。

山上 不動（やまがみ ふどう）／沖繩大学・法経学部法経学科三年

詩 部 門

詩部門佳作

壁画

安里 和幸

雨降る窓に小指の骨を転がし

野原の百合の群落を 水を蓄えた甕を抱えた少女が蹴散らす

真昼に置かれた石の孤立

精巧に歪められた空にそれを投げつける

大通りに並ぶ家々は全て太陽とともに傾き

にわかに見れた平野に影は映らない

大きな獣の臭い歯を寓意で隠し

煙と明晰夢で覆われた海辺から

透明な青年の彫像を掘りだす

その硬い皮膚から

蛆とともに湧き上がる光がある

眼差しは嘘であり

未完成の水平線に手で触れるとき

海の恍惚と諧調は薔薇の風とともに失われ

雲から落下する青い記憶のイメージが残る

多くの愛が欠けている遠方の部屋

暗いところから溢れ出る粘液で満たされた扉

あらゆる均衡の破れ

青年の彫像はそれらにしがみつ

夢精する 回虫のように

女囚は身を投げる

音響渦巻く冷たい金属の海峡に

天球から吊り下がる城

空気に曝されるまで忘却されていた

驚くべき回転体

目が醒めたなら

嘔吐しつつ歩いてくれ星のふちを切り取りながら

時間の流れが注ぎこむ湾が焼き払われ

腐敗する人夫の口腔がそれを飲みこむ
人夫は死ぬ 身体は放射状に開かれ
女の鋭い舌で書き散らした韻律で飾られ
黄昏の岸辺で再び蘇生する
金色の風が夜を包んで溶かし
夜明けの胎児が這いあがる

安里 和幸（あさと かずゆき）／琉球大学・法文学部総合社会システム学科三年

詩部門佳作

眠る。

川根 慎司

やあ、おはよう

私はいつの間に眠っていたのだろうか

いまわかるのは、目が覚めたということだけで

これが未だ夢じゃないというのなら

いま何時なんじで　ここは何処どこだ

私は　私は誰だ

私は

うるさい

騒がしいのだが

めつきり姿を見せなくなってしまった私の犬でもない

どこの犬だ　どこの誰だ

ここは私の家だ　なぜ君が吠える

ここは私の家だ　君の家じゃない

私の犬は　一体どこでなにをしているのか

少し　静かにしてくれないか

まぶたに重くのしかかり

まつげを固めるあの忌々しいめやにも

テーブルに置き去りにされた豚肉の空き缶詰も

全部まとめて洗い流している最中だというのに

受け入れている　最中だというのに

なあ、少し 静かにしてくれないか

目が覚める度に知らない場所にいるのはもう嫌なんだ
大きく遅しいガジュマルに寄りかかり

絞め殺された樹々を想いながら 眠りたい
ゆつくりと 眠りたい

ゆつくりと眠るために 私は起きている
いま目を閉じれば

次に夢から覚めたとき
私は一体 誰になっているのか

美しい青に塗りたくられた外壁の中

私以外、窮屈で眠れないことを知らない
ここが私だけの家だった頃を私は知らず
ここが私の家だった頃の私はもういない
どこのとも知らぬ犬が住み

赤と白が初夏を告げる

作業着と給料袋は青いタンスに押し込んで

来賓をもてなすために歌う
枕はまだ干されたままでいて
夢から覚めた私は

次の私を　ここで待つ

ゆっくと眠れるそのときに
それが何時で　そこが何処だろうと

私は　私のみまで

川根 慎司（かわね　ちかし）／沖繩工業高等専門学校・機械システム工学科四年

詩部門佳作

破れた家

霞 千明

破れた家

夏の暇に訪れる

生い茂る草木、破れた網戸、外された鉄格子
流れに抗うこともなく

荒れた庭

シークワーサーを育てていた

おばあとともに

夏の終わりの甘酸っぱさ

懐かしの味

二度と戻ってこない

彼岸花が飛んできた
死を予期させるような
どこからともなく種は飛び、やってくる

枯れたおばあ

浮世の人と霊界の人

様々な人に囲まれていた

見えざる人を降ろして交信

ひろがる繋がり、不思議だった

シーミーには墓で、盆や正月には仏壇で

壊れたつながり

みんなみんな散って行った

かき集めようとする母の背中

助け合うことのない人々

行事だけが縛り付ける

時に任せて崩壊していくのみ

破れた家
夏の終わり
かえっていく

霞 千明（かすみ ちあき）／沖縄工業高等専門学校・生物資源工学科四年

詩部門佳作

水風船

古謝 秀人

ある夏の日

僕と弟は水風船で遊ぶことになった

百円ショップで百八円の風船を買い

僕は風船に水をいれる

弟はこの作業がお気に召さないらしく

何処かへとかけていく

水を入れた風船は

ボールのように

涙のように

電球のように

やがて

出来の悪い冬瓜のように歪な形に膨らんだ

ならべた水風船は色も形もバラバラで

光がゴムと水に反射して

風が吹くたびに風船と一緒に

光と影がゆらゆら揺れる

いつの間にか来ていた弟が

風船を突然僕に投げつける

弟の手から放たれた水風船は

水しぶきを

光を

きらめかせ

僕に着弾する

濡れて肌に張り付く服は

お返しに投げた僕の水風船は

自由落下に従って

弟の手前

パチン！と

はじけた

割れた水風船は地面にうもれ
まばゆかった光のきらめきは
薄暗い地面のしみに変わった

兄が我慢をする中で

弟は自由に過ごし

僕らが水で遊ぶ中で

水がなくて苦しむ人がいる

嘘をつくのは当たり前で

正直者は馬鹿を見る

あちこちに

そんな不条理が溢れている

だからきつと

地球は丸くなんかなくて

水を入れすぎた風船のように
人の数が増えすぎて
歪んでしまったに違いない

そんな歪んだ地面は
僕には歩きづらくて

いつそのこと

パチン！

と割れてくれないかと

願っている

古謝 秀人（こじや ひでと）／沖繩工業高等専門学校・メディア情報工学科四年

詩部門佳作

キヤツチボール

島袋 昂也

閑散しきった空間で

みんな

下を向いている

ぼくもなかまに入ってたけれど

そこにはあつた

微妙な連帯

確実な疎外

じゃあね、と

見えない笑顔を作ってたけれど

取り繕ったぼくは
ばれていた。

あとで知った

みんな

見えないところで

繋がっていた

「ああ、だからぼくに回ってこないんだ！」

こんな僕の寂しさも

安易に伝えられる

はずもなく、

こん、こん、ぼとり。

こん、こん、ぼとり。

自問自答することに

跳ね返ってくる

その見えない感度は
だれかの
ぼくの気持ちかな。

ねえ、目を見てよ
僕と

キャッチボールをしているという
確信を与えてよ

「楽しいな」

「寂しいよ」

「辛いんだ」

それだけで

本心は

掴めないでしょ？

僕は疑ってしまうんだ。

本当の僕と

キャッチボール

目を見て投げた

これが本心

閑散しきった空間で

みんな

下を向いている

僕のボールに

気付いてくれる？

その相手が見つかる時まで

こん、こん、ぼとり。

こん、こん、ぼとり。

島袋 昂也（しまぶくろ こうや）／琉球大学・法文学部人間科学科二年

詩部門佳作

花火の話

真栄里 一青

花火って不思議なもので、ドーンと大きな音が空を裂いて炎がぱつかりと噴き出すんだよね。それが何発も何発も。なんでかしら、とつても綺麗だ。

那覇祭って十月にやるから、その日が来るたび肌寒いな、半袖はそろそろやめようかな、なんて思うんだ。夏は死んだな、長かったけどな、つてなる。そしてだるくなる。

花火はすごく綺麗だ。疎遠気味のあいつが、俺を嫌いなあの子が、花火を見ているんだ。それがすつごく嫌で、ずつと部屋でスマホいじってる。ドーン、ドーン、ドーン、ドーン、ドーン、ドーン、毛布がぴりぴりして、死にたいな、つてツイッターで呟くのやめる。ふあ、ぼも来ないしな。

一人じゃないんだよ

で？

一人じゃないってば

は？

惨めったらしいよ、花火が怖いよ、来るな、来るな、あんなの爆弾だ！やっと暗くなった空を千切って赤い青い黄色いきんきらきんの真昼間にする爆弾だ！一人になってえ、一人になりたくねえ！人とすれ違うのが下手だから青あざだらけ、摩擦で真っ赤になっているんだ。それを知ってる人とだけいたい、当たり前だろ、分かるだろ、みんな本当はワンチャン狙ったりしながら手首切っているんだろ？そのままだよ、花火が嘲笑う、んなわけねーだろメンヘラ乙、死んで、どうぞ、って。普段から俺を取り巻くみんなが俺に包丁突き付けてる。

一人にすんなよ

そういえば帰り道、なんとなく石ころひろったら案外綺麗だったよ。石英的なのがかくついでて。ひんやりしてて、握ったら少しほっとした。後生大事にするよ。

わかった

真栄里 一青（まえざと いっせい）／琉球大学・教育学部生涯教育課程一年

詩部門佳作

そこにある

喜瀬 眞太朗

生まれた時からそこにあつた

物心つくとき、あれが周りとは何か違うことに気づいた

周りの大人に聞いた

あれは何だ、と

すると、皆、眉をハの字に曲げて苦笑いをする

困ったような、残念がるような顔をしながら

小学生になつてもそこにあつた

この頃には、あれがどういう物なのか、薄々感じ取れていた

周りの友人に聞いた

あれは何故あるのだ、と

すると、皆、まるで口裏を合わせたかのように言う

「決まっているだろ、負けたからだ」

中学生になってもそこにあつた

あれが近くの大学に迷惑をかけたらしい

テレビのニュースからこう聞かされた

あれは危険だ、と

しかし、自分にはその危機感が伝わってこない

今はただ、友人との語らいのほうが大切な気がして

高校になってもそこにあつた

しかし今度は少し席をずらすそうだ

テレビでもラジオでも友人からも大人からもこう聞かされた

その程度の移動では意味は無い、と

しかし、その声は押さえつけられる

それを自分は、どこか諦めた目で傍観していた

そして今

結局、あれは席をずらすことはせず、
現在も平然と、そこにある

喜瀬 眞太朗（きせ しんたろう）／沖繩工業高等専門学校・メディア情報工学科四年

選 評

選評【小説部門】

第九回琉球大学びぶりお文学賞 選評

受賞作を出せずに残念！

大城 貞俊

今回の応募作品は八編。例年になく少なかった。私は第四回から選考に携わっているが、最も多い応募数は第五回目で二十八編もあった。もちろん、応募作の多さが、受賞作の質に比例するわけではない。応募作の多寡に関係なく、きらりと光る珠玉の作品と出会う喜びは大きいが、今回は受賞作を出すことが出来なかった。残念である。

佳作には二編を選んだ。「傷が膿む前に」（石嶺眞太郎）と、「かなさ」（山上不動）である。「傷が膿む前に」は、大人になった私が少年時代の出来事を振り返ったものである。主人公の少年期の微妙な心理が陰影を有して見事に描かれている。そして小説としても鮮やかな工夫がなされている。その一つが、主人公の少年時代と父の少年時代を重ねたことである。小学校四年生の私は、弟と一緒に浜辺で行われる綱引きに参加する。弟は父に黙って履いてきた父の草履をなくしてしまう。泣きべそをかいている弟と一緒に探してくれと頼まれるが、私はそっけなくしてしまう。父の少年時代は戦争の時代である。家族は台湾に疎開するが、兄を戦争で喪い、弟をマラリヤで喪う。兄弟を喪った父の無念さを、私の弟に接する態度を諭すように父は私に語って聞かせる。

戦争体験の記憶をうまく取り入れた方法は斬新であった。また、生や死を海亀やバナナに象徴する着想もユニークで文学的なセンスの良さを強く感じた。

「かなさ」にも好感を持った。作者は人間を全方位的に見る成熟した目を有しているように思われる。主人公は大学三年生の「仲宗根かなさ」で不登校に陥っている。父母の不仲や離婚もその一因だ。その「かなさ」が法律事務所でアルバイトをする。法律事務所を経営している「浦崎綾」の生き方や、相談にやって来る人々の姿を通して、人間を信頼し希望を取り戻す物語だ。登場する人物が多様な視点から描かれているところに作品の魅力もある。さらに登場人物の苦悩が主人公の現在と重ねられていることも、作品に広がりや深さをもたらしている。また、随所に散見される「生きること」への認識には嫌味が無く新鮮なインパクトもある。最後に「かなさ」のアルバイトが恋人の依頼であったという仕掛けもあり、向日的なエンディングは若者らしくいいと思った。

他の応募作品も言葉と格闘し、作品を生み出そうと努力する姿勢が感じられ好感が持てた。「スロー・ウオーキング」はとても素直な作品で、タイトルも内容とよくマッチしていた。文章力も佳作に劣らないほどに安定しており応募作品の中でも抜きん出ている。しかし、素直さや優しさが文学作品の場合、必ずしも成功するとは限らない。時には「毒」や「悪」が必要である。

「聖アントワーヌの憂鬱」の作者は博学である。ストーリーは、学園祭で文芸誌を発行しようという単純なものだが、作品は記憶に残るほどのインパクトがある。その一つは漢語的表現を纏った文体であり、もう一つは物語そのものの持つ力だ。ただ性急に作品を展開しすぎたせいか、理

解が困難な箇所も随所に見られた。小説は虚構であるが、見破られないような緻密な嘘をつきたい。「私の日常」は医学を学ぶ女子大生の日々を素直に描いた作品でエッセイ風な趣を有している。若い医学生の日常が垣間見られる珠玉の作品だ。ただ一〇枚ではやはり物足りない。

「誕生」はやや難解な作品である。小説と詩の境界をボーダレスにする意図が作者にあるのだろうか、いぶかったほどだ。何度か読み返したが、登場人物の具体的なイメージを結ぶのが困難だった。「ガルバニズム」と「空っぽ」は八枚と六枚で、応募規定の二〇枚以内には遠く及ばなかった。「以内」とは言え、少なくとも八割程度は書いてもらいたい。「ガルバニズム」は新鮮な発想で作品としても整っており、掌編小説のコンテストなら入選していたのではないか。「空っぽ」にも、新鮮な表現もあり、感心する認識もあるのだが、やはり受賞作には推薦できない枚数だ。応募作品全体の印象は、作品の題名にもう少し工夫が欲しいこと。そして、説明や描写だけでなく、時には感動するドラマを作って欲しいこと。さらに一〇枚以下の作品が三作品もあったので、規定の二〇枚に近づける努力をして欲しいと思ったことだ。

学生諸君には、古今東西の優れた作品をたくさん読んで、自分の作品と比べながら普遍的なテーマを模索する。この努力も、きつと受賞作を書く糧になるのではないかと思われる。もう一步の精進を期待したい。

（おおしろ さだとし／外部選考委員・作家）

第九回琉球大学びぶりお文学賞 選評

西森 和広

今回から小説部門の選考委員を務めることになりました。八編の各投稿作品について所感などを述べてみます（投稿受付順）。

「かなさ」は心の傷を抱えた大学生の主人公が他の問題を抱える人々との接触を通して希望を見出すという今日的なテーマを扱って構成されています。恋人や友人の言葉には耳を貸さなかった主人公が未知の人物の誘いには応じ、わずか数日の経験で心の問題を解決するという展開に少々無理があるのは確かです。全体に実生活に根差さない机上の創作という感は強く、様々な記述にそれは伺えます。例えば育ての親は「叔父叔母夫婦」ではなく「母の弟夫婦」のように書けば人間関係の把握が容易になります。触れられていない両親のその後も気になります。夫婦の関係は終わったとしても、子供はいずれかの親が引き取るのが普通で、兄弟に預けるといふのはよほどの事情があったはず。また「忌まわしき」母はなぜ息子のマイルドレスを知っていたのでしょうか。なぜ彼は母から連絡があったことをまず「叔父叔母夫婦」には相談しないのでしょうか。相談した恋人の返答が都合だからと暴力にまで及ぶのも解せません。内心は会いたいから相談するもので、はなから拒絶するつもりなら相談もしないのでは。以上は「瑣末」なことのようですが、その「瑣末」が気になるということは書き方が十分ではないということでしょう。さらに主人公は「六畳一間」を世界に生き、外界は「別の次元」とまで言いますが、少々大袈裟では。彼の部屋にはソ

ファーも置かれて案内外そうですし、一人暮らしてすからおそらく日々の食事や買い物にも出掛け、家賃や各種の支払いもし、携帯電話もしつかり利用しています。その他冒頭の描写は夢にしては説明し過ぎですし、法律事務所の相談客の挿話なども役者が仕込まれたのではと思われるようなでき過ぎの感があります。今後の成長を望みたいところです。

「誕生」は、共に事故に遭い、亡くなった双子の兄の右手だけを移植された弟が徐々に意識と記憶を取り戻してゆく話です。兄は美しい絵を描いたのに、その手で兄のように描くことができないう自分に絶望しますが、兄の代わりに生きるのではなく、兄の腕を借りながら自分自身を生きることが大事だと友人に諭されます。以上はこの大変詩的な作品について私が何とか理解した内容ですが、実はよく分かりませんでした。「小説」に決まり事があるわけではないとはいえ、「散文の物語」という基本認識はあるかと思えます。それについて考えてみると良いかと思えます。

「ガルバニズム」は星新一の世界を想わせるSF的で奇怪な小品です。いっそ主人公の名前などのローカルな味付けは捨ててしまった方が良いかもしれません。タイトルはなかなか素敵な「発明」ですが、登場人物が予告通り見事に「雷死」を遂げたというだけで終わり、実際どうしたのかという「科学的な」謎解きがないのが残念です。

「空っぽ」の主人公は清明祭に出掛けた折に本土からの観光客の様子に接し、彼らが期待する沖繩と自身を知る沖繩の現実との間にある落差に疑念を抱き、改めて自分自身の問題として取り組むべきことがあるという想いを馳せる。真摯なテーマに取り組んだむしろエッセーと言つべき作品です。

「傷が膿む前に」は時代設定をひと世代前に置き、慎重に作者自身との間に距離を取っている

点で他の作品とは異なっています。この距離の手堅い設定によって、本作に触れる読者はすんなり物語の中に入って行けるでしょう。全体にこねられた文章ですが、時折ぎこちない所が目につきまます。冒頭の一文などは随分たどたどしく、もう少しすっきりと書けるはずですし、最後の父の説諭の言葉、特にその後半などはむしろ無い方が良いと思われます。そして何といってもタイトルがもつたいない。より端的で効果的な命名があるかと思えます。ともかく今回の投稿作品中で最も素直に読ませてもらえた作品であるのは確かです。

「聖アントワーヌの憂鬱」の作者に筆力や展開力があるのは分かります。むしろ分かせ過ぎと言ふべきか。口語的な会話表現やメールのやり取りの文面などで現代の若者の日常表現が描かれる一方で、文語調の言い回しにおよそ日常的でない古めかしい表現や漢字の熟語が頻出し、また哲学的・芸術的な思惟をめぐらした文章が登場すると思うと、最後は一挙にSF的なエログロナンセンスの世界にまで到ります。筒井康隆の悪夢の世界を思わせるような展開ですが、様々な文体や趣向の仕掛け、配置に必然性があり感じられません。何よりも物語の鍵になるのが、その登場人物らが大袈裟に述べ立てるほどには重要とも思えない問題（文芸部機関誌への投稿数の不足）で、また主人公を陥れる肝心のヒロインの魅力が（私には）伝わってこない点などが弱いと言えるでしょう。今回一番の問題作ではありません。

「私の日常」は医学の道を進む女子学生の日常をさりげなく描き、「若い医学生が患者の身になって考える重要性を学ぶ」という筋立てで、特に新味はないものの、しっかりと読みややすい文章が好ましい作品になっています。しかし自身が失明の可能性のある病氣と診断された主人公も、

それを聞いたやはり医学生生の恋人も実に淡々とその事実を受け入れる姿には驚かされず。彼らにとって失明くらいは医学的「日常」の範囲内なのでしようか。そうであれば確かに医者が患者の身になって考えることはどれほど難しいことかと、妙に感心してしまいます。

「スロー・ウォーキング」の臨時教員を務める主人公の青年は、知人から姪が怪しげな店で働いているらしいとの相談を受け、動向を探ろうと、店に連絡を取って彼女を指名します。約束の日、二人は他愛ない会話交わしながらただ散歩を続けるだけで、結局彼は彼女に何も言えず、また翌日も同じような「デート」を繰り返します。しかし彼の素性に勘付いていた彼女は、批判的ではないその態度に心を動かされ、仕事は続けるが高校には通うと告げます。実にさわやかに二人のデートの様子が活写され、実に手慣れた文章だと感心します。ただ少々あつさりしすぎかもしれません。最後に全般として気になった点を一つ挙げて終わります。それは多くの方がわずか二行か三行ばかりで区切られた短い段落を多用している点です。ネットやメール上の短い表現スタイルに慣れた世代の傾向なのでしょう。散文には散文のリズムがあると思います。場面によって短い段落、長い段落を使い分けることが肝要で、それが散文ならではのリズムを産みます。小説は生活や人生のリズムに似て、様々なリズムの連鎖で作られてほしいと思います。

(にしもり かずひろ／法文学部教授)

新しい感性で沖繩の思いをかたちに

武藤 清吾

今回、次の二編は、佳作になったとはいえ新しい才能として開花していく可能性を感じた。沖繩の現実を背景に、そこに生きる人々の苦悩と希望を若々しくスピーディな展開で描いている。

「傷が膿む前に」は、沖繩の本土復帰前年、昭和四六年の「私」の家族をめぐる回想である。扱われているテーマも構成も明確で一気に読ませる内容であった。特に、父の草履をなくした弟を非難して悩む「私」の内面と、父と父の弟との悲しい過去とが重ねられていく場面が印象的だ。ひとつの家族の歴史に幾世代かの思いを包み込んでいく描写力に感心した。

そのうえで、二つの改善点を指摘したい。ひとつは、海亀の産卵の場面があっさりしすぎていくことである。ここでは、沖繩のいのちの象徴として海亀が表現されており、「私」の家族への思いを読むうえでも大切な箇所である。丁寧に書き込む必要がある。ただし、海亀といのちを結びつける表現は、沖繩と自然を扱った作品に散見されるものであり、使い古された陳腐な表現になることは避けたい。新しい感性による想像力の発揮が求められている。

もうひとつは、バナナの木的位置づけとその描写を再考してほしいということである。日本の敗戦直後、台湾で身よりなく暮らす父とマリアに罹って苦しむ父の弟にとって、バナナが生き延びるために必要な食料であるという描写はよくわかる。しかし、それと父からその話を聞いた「私」が隣家のバナナの木を切り倒す場面とが結びつかない。物語のクライマックスでもあり、

父と「私」にとつてバナナの木は何を意味するのか、読者に伝わる表現を求めたい。

「かなさ」は、両親の離婚で心を病んだ大学生仲宗根かなさが法務事務所でインターンを経験するという小説である。夫婦関係が悪化した男の身勝手な離婚要求、息子の親権をめぐる相談中に子どもに買い物をさせて「みんな死ね」と言わせる母親、中東でテロに巻き込まれた夫と別れようとする母親とそれに精神的に抵抗する娘との確執の描写には迫力がある。

また、客の自分勝手な意見や要求に果敢に対応する女性行政書士の人物造形や彼女自身も悩みを抱えて仕事に打ち込んでいる事情がわかつてくる展開は見事である。仲宗根かなさの他者を見る目とその内面心理の描写の確かさも作品を魅力的にしている。

しかし、後半から結末にかけて物語の展開が安易に流れたのが残念だ。特に三件目の母と娘の葛藤に心を大きく動かされていく場面が気になった。自らの両親の離婚による精神的打撃のほうはまだ軽いと感じ、「自分だけが不幸だ」と思い込んでいたと、比較的簡単に反省的に過去を受容していく。しかし、現実はその中でも心の苦しみを抱えているわけで、他者の事例との比較、だけで救済されていくという構図は読者の予測の範囲内でもあり、内容を薄いものにしていく。

また、法務事務所に研修を依頼したのが、かなさと付き合っていた法学サークルの女性であるというのもやや安易であった。他者との比較や他者の救済は現実にあることであり、そのこと自体に問題があるわけではない。しかも、現代の人間関係の希薄さからすると、他者との協同が期待されるのもよくわかる。そのゆえに、それを超える想像力が求められている。三番目の事例が最も描写力もあり説得的であったので、これを大きく膨らませていくと、より大きな物語としての

展開が期待できそうだ。

「誕生」は、一卵性双生児の兄を亡くした喪失感で絵が描けなくなってしまった少年を描く。モノローグのような文体を選んでるので、もう少し状況描写を入れるとわかりやすい展開になる。また、段落の分け方も気になるので、より読みやすい文体を選んでほしい。

「ガルバニズム」は、電気の生体刺激（ガルバーニ現象）と人食（カニバリズム）を結合した作者の造語がタイトルになっている。死の宣告をした教授が実際に感電死するという事件を軸に展開する。一つひとつの場面を丁寧書き込むと、より結末の衝撃が強くなると感じた。

「空っぽ」は、シーミー（清明）の先祖の墓参りを描く。摩文仁の慰霊碑の前で、家族で祈りを捧げていると、観光客らしき人に写真を撮られる。そのことに違和感を持った「私」が、沖繩の現実に関心を持ち続けることの意味を批判的に問おうとしているという内容である。文字量が少なく書き手の思いが十分に伝わりきれていないので、倍ぐらいの字数にして物語を書いてほしい。

「聖アントワーヌの憂鬱」は、フロベールの「聖アントワーヌの誘惑」を模している。原罪と欲望を幻想的に描くフロベールの世界を、ある大学における文芸部の部員間の確執と満たされないう欲望の処理をめぐる物語として書き換えようとしている。随所に計算された物語世界が提出されるが、人物造形に課題があり、内容的なわかりにくさが残った。それぞれの人物を描き分ける描写力を期待したい。

「私の日常」は、医学部五年生の女性が見学を訪れた病院で患者に「あなたたちに何が分かるね」と言われ、医師として生きることの難しさに直面する。その彼女自身が緑内障で治療を受ける立

場になり、医師として新たな思いを持つ姿が印象的だ。素直な内容ではあるが、小説としての要件である事件・出来事をしつかり書き込むと、より物語性のある小説になる。

「スロー・ウォーキング」は、中学校の臨時教員をしている青年が、女子高生の叔母から援助交際をやめるように女子高生を説得してほしいと頼まれ、実際に援助交際に行つて彼女と話し合うという小説である。状況の設定もよく描けており、作品としては読みやすいが、彼女の悩みをより詳細に描くと、物語としてのふくらみができてくる。

今回審査にあたり、新しい感性の芽を感じることができた。創作は書き続けることが大切である。多くの小説を読み、様々な作家の手法に出会い、自らの創作手法を身につけ、今後も、豊かな想像力で沖繩の思いをかたちにしていってほしい。

(むとう せいご／教育学部准教授)

選評【詩部門】

第九回琉球大学びぶりお文学賞 選評

詩的現実と詩的技巧

松原 敏夫

今回も残念ながら受賞作を出せなかった。これはいいぞと思う作品に出会えなかった。応募作は昨年よりも多かった。それぞれの位置で書いているぶんには、それぞれの面白さがあつたのだが、詩的表現の出来映えとして物足りない作品が多かった。結果、七篇の佳作だけということになった。

言葉の自在さを駆使してものごとや日常や人間をとらえて表現する。その面白さをつかんでほしい。詩を書く面白さというのは世界を言葉にすることである。詩の言葉は、書く人自身が自己を基点にとらえた自由な言語世界をつくり深化していく方法のひとつである。そのためには書くものが、言語意識を自覚的に持つ必要がある。そしてなによりも言語表現を好きになること。言葉で表現する面白さを身につければ、詩的創造精神の生成となる。君自身が持っている感受性、感情、思念を自在に言葉にし、豊かに表現することだ。

おとなしい作品が多い。応募者は若い世代だから、青春の文学として、世から浮いても背離しても、自分にしか書けない言葉の世界を創造する情念にかけたほうがいい。おそれる必要はない。

詩はなによりも精神の自由の産物なのだし、その自由を保証するジャンルである。

(受賞作) なし。

(佳作)

『壁画』(安里和幸・琉球大学・法文学部総合社会システム学科三年)

作者の作品はこれまで何回か読んでいる。詩的意識と言葉の凝縮、詩的技巧はなかなかのものがある。今回の作品は難解であった。何度も何度も読みかえた。そしてこれは、イマージュの詩ということに解した。題名が「壁画」なので、ある「壁画」に触発されたことを題材として書いたのか、あるいは作品自身を壁画としてみなして書いたのか。

この作品は比喩の多用、シュルレアリスムの自動速記の手法をもとっている。たしかに詩句形成の瞬間のセンスを感じさせる。ただ比喩が成功するのは、ある現実があつて、その現実を超えようとする言葉の表出がうまく合致した場合である。「精巧に歪められた空」「未完成の水平線」などの詩句は、暗示的だが、抽象に韜晦してしまっている。女囚、人夫、嘘、欠、暗い、身を投げる、嘔吐、腐敗、夜明けの胎児、夢精する 回虫のように、など現出する詩語から、青年の暗い屈折が背景にあるようにみえるが、存在の輪郭が分散している。詩的技巧に頼って書こうとする意図が先行するあまり過剰になつて輪郭がはつきりしないのだ。そうなると行と行の連結がつかりだす詩的世界がわかりにくいものになつてくる。つまり詩的現実の具体がみえなくなつてくる。

せつかく作り出したイマージュが断片的になってしまい、像の結びが困難な作品になっている。応募作のなかで、いちばん詩的表現の豊かな作品だった。作者はそうとう詩作品を読んでいて、詩作意欲のあるひとであることはわかった。次作を期待したい。

『眠る。』（川根慎司・沖繩工業高等専門学校・機械システム工学科四年）

眠るといふ習慣を素材にした世界。だがこの眠りには、すっきりしたものがない。「目が覚める度に知らない場所にいるのはもう嫌なんだ」。「私は誰だ」「次に夢から覚めたとき／私は一体誰になっていくのか」。「私」という存在への自意識が作者の内部にうごめいている。作者の境遇がなにか追い込まれた状況にあるのか、生の落ち着きを求めているのか。眠りは夢の床であり、目覚め、覚醒、という感覚は新しさへ発見の喜びがあつて、いいものだと思ふのだが。作者はそうではないらしい。いまの時間や青春が作者にとって価値のあるものなのか気になるが、実は反語的ないいかたをしているかもしれない。

『破れた家』（霞千明・沖繩工業高等専門学校・生物資源工学科四年）

故郷の廃屋となつた家をたずねて、変わってしまった共同体への哀愁を歌っている。この情景は作者の原風景でもあろう。あるいは生の根っこに依ろうとする心性なのだろう。故郷は変貌している。作者はそこをたずねていくが共同の感性が崩壊していることに気づく。この視線が作者の詩的動機である。共同感性が希薄になつている世の中の実情を叙情的に描いている。

『水風船』（古謝 秀人・沖繩工業高等専門学校・メディア情報工学科四年）

弟と水風船の遊びする楽しそうな情景から、ひょいと世界の現実へ移行して作品を高めている。遊びの日常から「不条理な」世界の現実をみつける方法に作者の批評意識が内在している。「地球は丸くなんかなく／水を入れすぎた風船のように……歪んでしまった」「パチン！と割れてくれないか」。これは世界へのメッセージであろう。

『キャッチボール』（島袋 昂也・琉球大学・法文学部人間科学科二年）

キャッチボールという言葉は社会の人間関係を示す言葉の比喩でもある。このキャッチボールは切ない。「こん、こん、ぼとり」という擬音が切ないのだ。この擬音はこの詩の余韻がよくでているところ。関係の疎外感、他者とつながりたい情感がよくでている。社会の陰翳、弱者への目線をもったひとでなければ描けない。

『花火の話』（真栄里 一青・琉球大学・教育学部生涯教育課程一年）

映像と心理が溶け合った表現がある。孤独と疎外感の内面を描いている。打ち上がった花が輝く花火と閃々とする自分の間にある人間模様の機微がでている。作品にある心境はなにか華やかさと対照的な暗さ、死の影がひそむ不穏な雰囲気にもちている。

『そこにある』（喜瀬 眞太郎・沖縄工業高等専門学校・メディア情報工学科四年）

基地問題が背後にある作品。基地を「あれ」という代名詞のいいかたでしかとらえられない感覚は、社会的現実への対峙のしかたを持たない世代の表現である。いまの沖縄の若い世代のおおかたの意識と感覚を書いているといってもいいだろう。作者は現実への傍観を告白して、こういうスタンスにいる自分を肯定してしまっている。一歩進んで現実の内実を語る方向へのまなざしがほしい。

（まつばら としお／外部選考委員・山之口貌賞受賞詩人）

独りよがりを恐れず

宮城 隆尋

びぶりお文学賞は学生が対象だ。若い世代の感覚、世界観を反映した詩、学生時代にしか書けない詩があつていい。些細な出来事に一喜一憂し、何気ない言葉をきっかけに右往左往するのがこの世代のありようだろう。それは程度の差こそあれ、世代にかかわらず人間の生きる姿とも言える。自作自演を重ね、答えの出ない問いを繰り返しながら、自己に正対しなければ道が開けな

いことに気づく。それ以前の独りよがりなさまをどれだけ表現できるかというのも、詩に近づく一つの方法だと思ふ。表現するには自己対象化の視点を得る必要があるから、大学生に相当する年代というのは十代の混沌を描くには最も適しているのかもしれない。

「花火の話」は〈ふあば〉〈メンヘラ乙〉など身の回りにあるであろう言葉をそのままつかつてゐる。構つてほしい気持ちがつぶやきに表れるが、受け取る側もそれに気づいてゐるから冷たい。携帯端末に文字として表示されることで言葉は冷たさを増し、包丁のように鋭くなる。何もかもがデジタル化され、常時ネットワークでつながることを強制されたような環境で四方八方から牽制され続けるのは息苦しい。その中で独りよがりになる（自由になる）のは想像以上に難しいのかもしれない。〈惨めつたらしいよ〉で始まる第5連には焦燥感にじみ、リアリティーがある。ただ〈一人にすんなよ〉に呼応して〈わかつた〉と終わつてゐることは違和感を抱いた。しかし、そこに安易さを感じたのは、読む側の独りよがりな期待感があつたからなのかもしれない。

一方でとても学生らしからぬ作風もいい。「眠る」には寓話的表現のおもしろさがある。登場人物の記憶や境界が揺らいでゐることで、読み手の心をざわつかせる。想像力を刺激し、多様な解釈を許す作品だ。

「破れた家」は後半の詩行に現在性、批評性を感じた。しかし〈崩壊していくのみ〉と書くだけでは工夫が足りないと思う。「そこにある」は社会問題を切り取る際のアプローチの仕方が平凡で物足りなさを感じるが〈あれ〉を最後まで明かさないうバランス感覚がよかつた。「キャッチボール」は最後まで〈こん、こん、ぼとり。〉という寂しい響きが続く。相手は見つからず、壁当て

を続けているという展開には救いがないが、その情景には読み手を激しく揺さぶる切なさがある。「水風船」は水がなくて苦しむ人がいることを不条理だと書く倫理的なさまは凡庸だが、人間が増えすぎて地球がゆがんでいるというのが面白い。「壁画」は素材の羅列のようで全体がひとつの像を結ぶことがない。ただそれでいけないということではなく、意味の伝達を拒否する意図を持っているとすれば、まさに壁画のように眺めて詩行を味わえる魅力がある。ただ意味性の否定を感じながら読んでいくと最終行の閉じ方には一貫性が感じられず残念だった。

わたし個人としての評価が高い順に言及させてもらった（選考会での議論を経て二人の委員が一致した作品の評価順は掲載の通り）。今回からびぶりお文学賞の選考に関わらせていただくことになり、多様な作品に出合うことができた。正賞の該当作を出せなかったことは残念だが、佳作となった7編にはそれぞれかけがえのない魅力がある。もちろん選外となった作品にもさまざまの魅力があった。雨の中で（傘で水を防ぐ）ロボットたちが登場したりする「明日も」をはじめ、「嘲笑の中心で」「ちる」「足元」「名前」「タガツカ」「焚書の歌」などだ。空虚なパロディとも読めるが、ロマンチズムと対峙する詩語の力を示唆しているようにも感じる。「ものさしの重力質量」という作品もあった。

文学賞はスポットライトを当てるためのひとつのツールであり、序列化は便宜上、行われるものだ。詩は本来、読み手の数だけ多様な解釈が許容されるべきであり、ひとつの基準によって序列化できるものではない。書き手は独りよがりになることを恐れず、自由に書くべきだし、そのように書いてこそ独創性を高めることにつながる。意味、メッセージの伝達を越えたイメージの

広がりを生み出すことができれば、詩語の力を引き出し、普遍性を獲得する近道になるだろう。書き手は時には負のイメージを許容し、表現することも必要になる。倫理観で言葉を縛る必要はない。最終行で何かしら終わった、まとまったような感じを出す必要もない。結論が出ない問いの方が現実には多く、まとまっている時点で詩語を殺してしまっている場合もある。入選作に顕著だったように思うが、書き手にはより身軽な姿勢で自己に正対し、自由に書いてほしいと願う。

(みやぎ たかひろ／外部選考委員・山之口猷賞受賞詩人)

第九回琉球大学びぶりお文学賞 選考経過

第九回琉球大学びぶりお文学賞は、平成二十七年五月一日から十月二十九日までを募集期間とし、小説部門は八編、詩部門は百三編の応募がありました。所属ごとの内訳は次のとおりです。

【小説部門】 法文学部Ⅱ二編、教育学部Ⅱ一編、理学部Ⅱ二編、工学部一編、医学部一編、他大
学Ⅱ一編。

【詩部門】 法文学部Ⅱ三編、教育学部Ⅱ三編、農学部Ⅱ四編、理学部Ⅱ二編、他大
学Ⅱ九十一編。

また、学年ごとの内訳は次のとおりです。

【小説部門】 一年次Ⅱ0編、二年次Ⅱ三編、三年次Ⅱ三編、四年次Ⅱ一編、五年次一編。

【詩部門】 一年次Ⅱ六編、二年次Ⅱ二編、三年次Ⅱ二編、四年次Ⅱ五編、高専四年Ⅱ八十八編。

小説部門に関しては、応募数が八編であったため、当初予定していた附属図書館職員による一次選考は行わず、全ての応募作品に対し三名の選考委員（大城貞俊氏、西森和広氏、武藤清吾氏）による選考を行いました。詩部門に関しても、同様に附属図書館職員による一次選考は行わず、全ての応募作品に対し二名の選考委員（松原敏夫氏、宮城隆尋氏）による選考を行いました。

選考会議は、両部門ともに十二月一日に開催し、既に発表のとおり、入選作を選出しました。これらの作品を含め、応募作についての選評は、前回の選考委員による選評をご覧ください。

平成十九年に創設された本文学賞は、来年度、第十回という記念すべき節目を迎えます。今年度、残念ながら両部門ともに受賞作に該当する作品がなく佳作のみという結果でしたが、今回惜しくも受賞に届かなかった方、また作品を通して本文学賞に興味を持った方々には、来年度までに力をつけて是非チャレンジしていただきたいと願っています。

（附属図書館職員）

第9回 琉球大学びぶりお文学賞

募集締切：平成27年10月29日(木)必着
発表予定：平成27年12月上旬

【小説部門】

受賞作1編 = 海外旅行またはノート型パソコン(20万円以内)

佳作数編 = 1編につき図書カード5万円分

※海外旅行を選取した受賞生は、研修内容を「海外見聞記」として図書館「びぶりお」で公表することを義務付ける。

【詩部門】

受賞作1編 = 図書カード5万円分

佳作数編 = 1編につき図書カード1万円分

【選考委員】

小説部門/大城貞俊(作家)、西森和広(法文学部教授)、武藤清吾(教育学部准教授)

詩部門/松原敏夫(山之口顕賞受賞詩人)、宮城藤尋(山之口顕賞受賞詩人)

【応募要領】

●ジャンルは小説・詩の2部門とする。

●未発表作品に限る。

●日本語で書かれた作品とする。

●応募資格

・沖縄県内の大学・大学院大学・短期大学・高等専門学校に在学する学部学生(高専の場合、本科4年次以上)及び大学院生とする。

・ただし、過去において受賞作となった作品の作者は、同一部門に応募することはできない。

●応募方法

・小説部門・詩部門ともに、A4判縦長用紙に夕夕書き、1枚につき30字×40行、11ポイントの文字で印字する。

・小説部門の応募原稿は、20枚以内とし、1人1編の応募とする。

・詩部門の応募原稿は、1編2枚以内とし、1人3編まで応募可能とする。

・小説部門と詩部門の重複応募を認める。

・必ず通し番号(ページ番号)を入れて右肩を綴じる。

・書き始めにタイトル、氏名を明記する。ペンネーム可。

・原稿の末尾に、住所、電話番号、メールアドレス、氏名(本名・ふりがな)、

大学名・学部・学科(大学院の場合は研究科)、学年を付記する。

・ホームページの投稿用フォームをダウンロードして貼り付ける形でも構わない。

・(個人情報応募に関する連絡以外には使用しません)

・応募手段は、直接持参、郵送、Eメールでの送付(メール添付での応募の場合、PDF形式)とする。

・応募原稿は返却しない。

・入賞作品の著作権は、琉球大学に帰属するものとする。

●送付先および問い合わせ

〒903-0214 西原町字千原1番地 琉球大学附属図書館

情報サービス企画係 電話：098-895-8167 mail：kikaku@lib.u-ryukyuu.ac.jp

びぶりお文学賞

検索

過去の受賞作品
募集や選評が
読めます！

第九回琉球大学びぶりお文学賞作品集

発行日 二〇一六年三月十四日

編集 琉球大学附属図書館

発行 国立大学法人琉球大学

〒九〇三―〇二一四

印刷 株式会社 近代美術
沖縄県中頭郡西原町字千原一番地



第9回 琉球大学びぶりお文学賞

<小説部門>

佳作

傷が濃む前に
かなさ
石嶺 眞太郎 (琉球大学)
山上 不動 (沖縄大学)

<詩部門>

佳作

壁画
眠る。
破れた家
水風船
キャッチボール
花火の話
そこにある
安里 和幸 (琉球大学)
川根 慎司 (沖縄工業高等専門学校)
霞 千明 (沖縄工業高等専門学校)
古謝 秀人 (沖縄工業高等専門学校)
島袋 昂也 (琉球大学)
真栄里 一青 (琉球大学)
喜瀬 眞太郎 (沖縄工業高等専門学校)



第9回 琉球大学びぶりお文学賞

<小説部門>

佳作

傷が濃む前に 石嶺 眞太郎 (琉球大学)
かなさ 山上 不動 (沖縄大学)

<詩部門>

佳作

壁画 安里 和幸 (琉球大学)
眠る。 川根 慎司 (沖縄工業高等専門学校)
破れた家 霞 千明 (沖縄工業高等専門学校)
水風船 古謝 秀人 (沖縄工業高等専門学校)
キャッチボール 島袋 昂也 (琉球大学)
花火の話 真栄里 一青 (琉球大学)
そこにある 喜瀬 眞太郎 (沖縄工業高等専門学校)